

般若心経

皆さんは、孫悟空（そんごくう）・猪八戒（ちょはっかい）・沙悟浄（さごじょう）の三人が三蔵法師（さんぞうほうし）のお伴をして天竺（てんじく）（今のインド）へ仏さまの教（おしえ）を書いたお経を取りに行く『西遊記（さいゆうき）』という中国の物語を知っていますか？

その物語のモデルとなった三蔵法師が、この『般若心経（はんにやしんぎょう）』というお経を中国に伝えた、玄奘（げんじょう）（600または602-664）というお坊さんです。

玄奘が活躍した時代は、今から1300年以上も前の中国唐（とう）時代でしたから、インドへ行こうにも飛行機や車などがあるはずがありません。そこで馬に乗ったり、歩いたりしてインドへ行ったわけですが、途中にはゴビ砂漠やタクラマカン砂漠などという難所もあり、恐らくは死を覚悟しての旅だったと思います。中国の貞観（じょうがん）3年（629）に都である長安（ちょうあん）を立ち、三年余の旅路を経てインドに到達し、その後は一所けんめいに仏の教を学び、16年後の貞観19年（645）に多くのお経や仏像などを持って中国に帰りました。中国に帰ってからの二十年余の間に76部1347巻というものすごい数のお経をインドの言葉から中国の言葉、つまり漢字に翻訳したのです。その中の一つがこの『般若心経』なのです。

このようにしてインドから中国へ伝えられたお経は奈良（なら）時代や平安（へいあん）時代の入唐僧（にっとうそう）（中国へ渡ったお坊さん）などによって海を渡り、日本に伝えられたのでした。しかし、伝わったといっても、当時はまだ印刷技術が発達していなかった時代ですから、お経は多くの人達の手によって紙・墨・筆を使って書き写されたのです。

漢字ばかりで書いてあるので、ちょっと大へんかも知れませんが、最初に一行あげて「心経」と書いてあるのがお経の名前で『般若心経』を簡単にした呼び方です。次の行の「観自在菩薩（かんじざいぼさつ）（観音（かんのん）さまのこと）」というところから、後から四行目の「菩提薩婆呵（ぼだいそばか）」までがお経の本文です。お経の本文は一行に書く字数が決まっています。ちょっと数えてみてください。一行十七字になっていませんか？ただ、後から四行目の「揭諦掲諦（ぎゃていぎゃてい）」の行は、呪文のような言葉なので字数に関係なく、一行に書かれています。また最後の三行は、このお経を読んだ時の功德（くどく）（ご利益（りやく））が書かれています。多くはこの部分が書き写されていません。

この『般若心経』は、日本で最もよく知られ、親しまれているお経で、今もたくさんの人達によって、このお経が書き写されています。

最後にかたちについて一つ。かたちは巻き物になっていますが、お経が書き写されている所にはごくすく界線（かいせん）という線が引かれています。もちろん、本文が曲らないような働きをしていますが、これは昔、中国において紙が発明される以前に書物を木簡（もっかん）（木をうすく削って短冊状（たんざくじょう）にしたもの）に書き写したなごりなのです。その一本一本の上下を紐（ひも）で編んだかたちが、紙に書いたお経などのかたちになっていったものなのです。

四苦八苦

四苦八苦とは、仏教における苦の分類、苦とは、「苦しみ」のことではなく「思うようにならない」ことを意味します。根本的な苦を生・老・病・死の四苦とし、この根本的な四つの思うがままにならないことに加え、愛別離苦（愛する者と別離すること）。怨憎会苦（怨み憎んでいる者に会うこと）。求不得苦（求める物が得られないこと）。五蘊盛苦（人間の肉体と精神が思うがままにならないこと）の四つの苦（思うようにならないこと）を合わせて八苦と呼びます。

この八苦は、生きていくかぎりついて廻り、この苦から逃れるには、仏法僧の三法印に帰依して、八正道を實踐するしかないといふ教は教えています。

三法印とは、諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜を指します。

諸行無常は、世の中のあらゆるものは一定ではなく、絶えず変化し続けているという真理です。世の中の物事は常に変化を繰り返す、同じ状態のものは何一つありません。それにも関わらず、私たちはお金や物、地位や名誉、人間関係や自分の肉体に至るまで、様々なことを「変わらない」と思い込み、このままであってほしいと願ったりもします。それが、「執着」へとつながるのです。このような苦しみにとらわれないためには、ものごとは必ず変化するのだということ、全てが無常の存在であることを理解することが大切です。

諸法無我は、全てのものごとは影響を及ぼし合う因果関係によって成り立っていて、他と関係なしに独立して存在するものなどない、という真理です。自分のいのちも、自分の財産も、全て自分のもののように思いますが、実はそうではありません。世の中のあらゆるものは、全てがお互いに影響を与え合って存在しています。自然環境と同じように、絶妙なバランスのうえに成り立っているのです。こう考えると、自分という存在すら主体的な自己として存在するものではなく、互いの関係のなかで“生かされている”存在であると気がつきます。

涅槃寂靜は、これは、仏教の目指す苦のない“さとりの”境地を示しています。しかし、世の中は自分の思い通りにならないことばかり。そんなとき、人は自分以外のものに原因を求め、不満になり、怒りを抱くものです。仏教では、こうした怒りは全て、自分の心が生み出していると考えます。その原因となっているのが、疑い、誤ったものの見方、プライドや誇り、欲望などの「煩惱」。こうした煩惱を消し去り、安らかな心をもって生きることが“さとりの”境地なのです。そこに到達するためには、先に挙げた“諸行無常”“諸法無我”をきちんと理解することが大切です。

八正道とは、お釈迦さまの最初の説法において説かれたとされる、修行の基本となる八種の實踐徳目です。それは、正見（正しい見方）、正思（正しい考え方）、正語（正しい言葉）、正業（正しい行い）、正命（正しい生活）、正精進（正しい努力）、正念（正しい意識）、正定（正しい精神の安定）の八つです。

人は「自分本意」の小我で、不平・不足・不満などの苦の種をつくりそれを大きく育ててしまう愚かな、さとることが出来ない凡夫ですが、この三法印や八正道を理解し少しでも実践出来たならば、安らかな人生を送ることが出来るかもしれません。

三福田

供養することによって福德が得られる敬田・恩田・悲田の三称。または、三宝のことをいい、農夫が春、田圃に種子を蒔き、秋に収穫を得るように、徳を積んでその果報を受けることが人間にとって真の幸福であり、それにはどういう田圃に種子蒔きをすればよいか。それが三福田の教えです。

第一は敬田といって、仏法僧の三宝を敬うことです。「世間虚仮。唯仏是真」(聖徳太子)という。現象世界は仮り物で、ただ仏の世界のみが真実であるという。この唯一真実なる仏を敬い、その教え(法)と、それを伝え導いてくれる僧に、己れを空しくして絶対随順するとき、私達は小我から大我に生まれ変わることが出来るのです。何一つ頼りにならない虚仮の日常生活において唯一真実なるものを身につけるほど人間として尊く幸せなことはありません。

第二の恩田は、ご恩報謝の徳を積むことです。私達にとって父母祖先の恩ほど大きいものではありません。切り花はどんなに美しくとも根がないのですぐ枯れます。私達の生命の花を長く保つには、根に施肥しなくてはなりません。それは孝順心、真実をもって親に仕えることと亡き祖先に対しては追善のまことを捧げることです。

第三の悲田は、いつくしみの心をもって恵まれない周囲の人々を施しをすることです。さらには無縁の精霊に対しても供養のこころを忘れないことです。

三宝（十七条の憲法 第二条）

原文

二曰。篤敬三寶。三寶者仏法僧也。則四生之終歸。萬国之極宗。何世何人非貴是法。人鮮尤惡。能教從之。其不歸三寶。何以直枉

読み下し

二に曰わく、篤く三宝を敬え。三宝とは仏と法と僧となり、則ち四生の終歸、万国の極宗なり。何れの世、何れの人かこの法を貴ばざる。人尤だ悪しきもの鮮なし、能く教うれば従う。それ三宝に帰せずんば、何をもってか枉れるを直さん。

現代語訳

二にいう。あつく三宝(仏教)を信奉しなさい。3つの宝とは仏・法理・僧侶のことである。それは生命ある者の最後のよりどころであり、すべての国の究極の規範である。どんな世の中でも、いかなる人でも、この法理をとうとばないことがあるか。人で、はなはだしくわるい者は少ない。よく教えるならば正道にしたがうものだ。ただ、それには仏の教えに依拠しなければ、何によってまがった心をただせるだろうか。

十界（じっかい）

十界とは、天台宗の教義において、人間の心の全ての境地を十種に分類したもので、六道の地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人界・天界に四聖の声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界を付加したものです。十界論、十方界あるいは十法界とも言われ、これらの総称が十界です。

日蓮宗の日蓮聖人も「^{しばしば}教他面を見るに、^{あるとき}或時は^{むさぼ}貪り現じ、或時は^{おろ}癡か現じ、或時は^{てんごく}諂曲なり。瞋るは地獄、^{いかに}貪るは餓鬼、^{おろ}癡かは畜生、諂曲なるは修羅、喜ぶは天、平らかなるは人なり。（中略）世間の無常は^{めのまえ}眼前にあり。^{あに}豈人界に二乗無からんや。無顧の悪人も^{なおきいし}猶妻子を慈愛す、菩薩界の一分なり。但、^{ただし}仏界ばかり現じ難し。」と述べています。この十界を簡単に述べると。

- 1 仏界は、仏のいる世界で、崩れることのない自由自在の生命活動（常）、生きていくこと自体を楽しむ絶対の幸福感（楽）、何物にも^{ふんどう}粉動されない円満かつ強靱な主体性（我）、何物にも汚染されない清浄な生命（浄）、以上の四つに象徴される最高の^{きょうがい}境涯とされています。
- 2 菩薩界は、思い遣りや優しさにあふれた世界で、自身のことよりも、他人の幸せを願い、そのために尽くす状態です。
- 3 ^{えんかく}縁覚界は、達人の世界で、^{どっかく}独覚ともいい、^{しょうもん}声聞が先人の教えを求めるのに対し、自然現象等を通じて自ら分々の悟りを得る状態です。
- 4 ^{しょうもんかい}声聞界は、向上心、学び訓練する世界で、先人の教えを学ぶ中から、無常観など、分々の真理を会得していく状態です。
- 5 天界は、^{しよてん}諸天が住む世界、喜びの世界で、思うとおりになって、喜びを感じている状態です。（有頂天はここからきている言葉）
- 6 人間界は、通常の世界、平常心の世界で、人間らしく、平常で穏やかな状態です。
- 7 修羅界は、争いの世界、競争心の世界で、ひねくれ曲がって、^{しょうた}勝他の念に^か駆られている状態です。
- 8 畜生界は、動物の世界、浅はかなで愚かな世界（^{ぐち}愚癡）で、理性や道理ではなく、目先のことにとらわれ、本能のおもむくままに行動する状態です。
- 9 餓鬼界は、飢餓に苦しむ世界、自分の事しか考えない世界（^{けんどん}慳貪）です。不足感からくる^{どんよく}貪欲にとらわれている状態です。
- 10 地獄界は、様々な^{にく}苦しみ憎しみにあふれた世界、怒りの世界（^{しんい}瞋恚）です。地は低下を意味し、獄は拘束されて不自由なことで、苦しみや憎しみに囚われそこから抜け出すことが出来ず、^{いかり}瞋を感じ苦悶する状態です。

仏法では、私達の生命が内より実感する状態を、こうした十種類の^{きょうがい}境涯に分類しています。そして事実、我々の生活を委細に観察してみると、様々な縁に触れて悩んだり喜んだり、その時々十種の境界のいずれかを感じて生きていることが分かります。ただし、三悪道・四悪趣といった低い境界の方が、たやすく現れ四聖等の勝れた境界（就中最高の仏界）はなかなか現じがたいのが実際です。

梵天

梵天^{ぼんてん}は、仏教の守護神である天部の一柱。古代インドの神ブラフマーが仏教に取り入れられたもので、十二天に含まれます。梵天は、帝釈天と一対として祀られることが多く、両者を併せて「梵釈」と称することもあります。

古代インドのバラモン教の主たる神の1つであるブラフマーが仏教に取り入れられたものです。ブラフマーは、古代インドにおいて万物の根源とされた「ブラフマン」を神格化したもので、ヒンドゥー教では創造神ブラフマーはヴィシュヌ（維持神）、シヴァ（破壊神）と共に三大神の1人に数えられました。

この神が仏教に取り入れられ、仏法の守護神となり、梵天と称されるようになりました。なお、釈迦牟尼^{しやくかむに}が悟りを開いた後、その悟りを広めることをためらいましたが、その悟りを広めるよう勧めたのが梵天と帝釈天とされ、この伝説は梵天勧請^{ぼんてんかんじよう}と称されます。

また、天部（六道や十界の1つである天上界）は、さらに細かく分別されますが、色界十八天のうち、初禪三天の最高位（第三天）である大梵天を指して「梵天」と言う場合もあります。神としての梵天はこの大梵天に住み、その下の第二天である梵輔天^{ぼんほくてん}には、梵天の輔相^{ほそそう}（大臣）が住み、さらにその下の第三天である梵衆天^{ぼんしゆうてん}には、梵天の領する天衆がこの天に住むとされます。

日本における梵天・帝釈天一対像としては、東大寺法華堂（三月堂）^{かんしつどう}、法隆寺旧食堂^{そどう}塑像、唐招提寺金堂木像^{とうしやうだいじ}などが奈良時代に^{さかのほ}遡る遺例として知られ、奈良・興福寺には鎌倉時代作の像があります。これらの像はいずれも二臂^{にび}の、普通の人間と同じ姿で表され、頭には宝髻^{ほうけい}を結って、手には^{ほつす}扠子や鏡、柄香炉^{えいこうろ}を持つなど、唐時代の貴人の服装をしています。

これらの梵天像と帝釈天像はほとんど同じ姿に表現され、見分けの付かない場合もありますが、帝釈天像のみが、衣の下に皮製の甲^{よろい}を着けている場合もあります。

密教における梵天像は四面四臂^{しひ}で表され、これはヒンドゥー教のブラフマー像の姿が取り入れられたものです。6世紀半ばから8世紀ごろのインドの様式が源流ではないかという指摘があり、エレファンタ石窟群にあるブラフマー像が例の1つとして挙げられています。彫像^{ちやうざう}では京都・東寺講堂の木像が著名^{ちやうめい}です（国宝）。東寺像は四面四臂の坐像で、4羽の鷲鳥（ハンサ鳥）の上の蓮華座に乗っています。

聖観音^{しょうかんのん}を本尊とした梵天と帝釈天の三尊形式も見られ、平安時代に二間観音供のために祀^{まつ}られたものである。この遺例としては、鎌倉時代後期の東寺の白檀像^{びやくたんざう}、愛知県の瀧山寺に見ることができます。瀧山寺像は、^{うんけい}運慶の作とされています。

「万物の根源」という漠然としたものを造形化した神で、親しみが湧きにくいいためか、インドでも日本でも梵天に対する民衆の信仰はあまり高まらなかったようです。

帝釈天

帝釈天^{たいしやくてん}は、密教の守護神である天部の一つで、バラモン教・ヒンドゥー教・ゾロアスター教の武神（天帝）で、インド最古の聖典である『リグ・ヴェーダ』の中で最も多くの賛歌を捧げられている軍神・武勇神インドラと呼ばれる重要な神さまです。インドラの名前は帝と意識して冠したもので、漢字に音写して釋提桓因^{しやくだいかんいん}と呼ばれ、釋は^{あざな}字。提桓因は天主のことです。妻は阿修羅の娘である舍脂^{しゃし}で、この親の阿修羅とも戦闘したという武勇の神でしたが、仏教に取り入れられ、成道前^{せいどう}から釈迦を助け、またその説法^{ちようもん}を聴聞したことで仏陀に帰依し、梵天と共に^{ごほう}護法の善神とされています。

帝釈天は須弥山^{しゆみせん}の頂上^{きんじよう}の喜見城^{しちよう}に住んでいて、忉利天^{とうりてん}に住む神々の統率者であると同時に四天王を統率し、人間界をも監視します。即ち衆生が殺生、盗み、妄語^{もうご}等を為さないか、父母に孝順であるか、師長^{しちよう}を尊敬するか、貧しい人に施しをするかどうか、毎月八日、二三日には人間界に使者^{つか}を遣わし、一四日、二九日には王子を遣わし、一五日、三〇日には四天王が自ら姿を変えて人間界を巡歴し、衆生の善悪の事を監察するといわれています。従って人々はこれらの日を六齋日^{ろくさいじつ}といっって行いをつつしむのです。

帝釈天が、人間だった頃の名前は橋戸迦^{きようしか}であると説かれています。かつて昔にマガダ国の中で名を摩伽^{まか}、姓を橋戸迦^{きようしか}という、福德と大智慧あるバラモンがいました。彼には知人友人が32人いて共に福德を修めて命終^{みようじゆう}し、須弥山の頂の第2の天上に生まれました。摩伽バラモンは天主となり、32人は輔相大臣となったため、彼を含めた33人を三十三天といい、これゆえに釈迦仏は彼の本名である橋戸迦と呼ぶといひます。また、このために彼の妻・舍脂を橋戸迦夫人と呼ぶこともあります。

日本では、頭上に宝髻^{ほうけい}を結び、中国式の礼服を着た二臂像^{にびぞう}として表現されることが多く。また、着衣下^{ちやくい}に甲冑^{かちゆう}をつけることもあり、手には金剛杵^{こんごうしゆう}や蓮茎^{れんこん}などを執ることがあります。

阿修羅

阿修羅は八部衆に属する仏教の守護神。「阿素洛」「阿素羅」「阿蘇羅」とも呼ばれたり、「修羅」とも呼ばれています。

阿修羅という名前は、梵語では古代インド語の「アスラ(A sura)」の音写とされ、「生命(asu)を与える(ra)者」を意味しますが、その一方で「非(a)天(sura)」とも解釈され全然性格の異なる神を表しています。

またペルシャなどでは大地にめぐみを与える太陽神として信仰される一方で、インドでは熱さを招き大地を干上がらせる太陽神として、常に「インドラ(帝釈天)」と戦う悪の戦闘神とされています。

戦闘神とされる阿修羅、その背景にはこのような逸話があります。阿修羅の一族は、帝釈天が主である三十三天に住んでいました。阿修羅には「舍脂」という美しい娘がいて、その美貌は神々の間でも評判でした。阿修羅は、いずれ舍脂を帝釈天に嫁がせたいと思っていました。

しかし、帝釈天は舍脂を力づくで奪い取ったのです。それを怒った阿修羅が帝釈天に戦いを挑むことになりました。凌辱された後の舍脂は戦の最中であっても逆に帝釈天を愛してしまったことに阿修羅はさらに怒り、争いは天界全部をも巻きこみ、阿修羅は復讐に燃える悪鬼となっしまい、その戦いは常に帝釈天側が優勢でした。

しかしある時、阿修羅の軍が優勢となり帝釈天が後退していた最中、蟻の行列にさしかかります。蟻を踏み殺してしまわないようにという帝釈天の慈悲の気持ちから、軍を止めることに。そんな行動に阿修羅は「帝釈天の計略があるかもしれない」と疑念を抱き、撤退していきました。その後も戦いましたが、力の神である帝釈天に勝てる筈もなく敗れた阿修羅はこれをきっかけに天界であるとう利天と善見城から追放されてしまうのです。

この逸話から、阿修羅にまつわるいくつかの説が生まれました。一説はこの話が天部の中で広まり、追われることになったしまったという説。また一説では、阿修羅の行動は確かに正義です。

しかし、舍脂はその後、帝釈天の正式な夫人となっていたにも関わらず、戦いを挑むうちに赦す心を失ってしまった・・・。

つまりたとえ正義であっても、それに固執し続けると言うことは、善心を見失い妄執の悪となってしまう。このことから、その闘争的な性格から五趣の人と畜生の間に追加され、六道の一つである阿修羅道(修羅道)の主となっしまったと言われていいます。

日本では、争いの耐えない状況を修羅道に例えて修羅場(しゅらば)と呼ぶのも、この逸話が元になっています。しかしその後、仏教に取り入れられてからは、釈迦を守護する神と説かれるようになりました。

六文銭＝六道銭（冥銭：めいせん）

六文銭は、三途の川の渡し賃ともされる冥銭、地蔵菩薩信仰における六道にいるとされる六人の地蔵菩薩に渡す、六道銭のことです。また、これらを図案化した日本の家紋「銭紋」の一種です。

銭紋は銭貨を図案化したもので、銭は富を象徴するものである一方、三途の川の渡し賃として死者とともに納棺するもので、この六道銭は地蔵信仰の影響と言われていません。また、真田幸村で有名は真田家の家紋として六文銭は有名ですが、六文銭は定紋ではなく本来は戦時の旗に入れる旗紋など替紋として使用されていたと言われ、この六文銭は六紋連銭ともいわれます。六道とは、仏教において迷いあるものが輪廻する（りんね）という、6種類の迷いある世界のことで、天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道を言います。仏教では、輪廻を空間的事象、あるいは死後に（おもむ）趣く世界ではなく、心の状態として捉え。たとえば、天道界に趣けば、心の状態が天道のような状態であり、地獄界に趣けば、心の状態が地獄のような状態である、と解釈されます。

天道は天人が住まう世界です。天人は人間よりも優れた存在とされ、寿命は非常に長く、また苦しみも人間道に比べてほとんどないとされます。また、空を飛ぶことができ（きょうらく）のうちに生涯を過ごすといわれます。しかしながら煩悩から解放されていません。また、天人が死を迎えるときは5つの変化が現れ、これを五衰（天人五衰）と称し、体が（あか）垢に塗れて悪臭を放ち、脇から汗が出て自分の居場所を好まなくなり、頭の上の花が萎む（しぼ）と言われます。

人間道は人間が住む世界で、四苦八苦に悩まされる苦しみの大きい世界であるが、苦しみが続くばかりではなく楽しみもあるとされます。また、仏になりうるという救いもあります。

修羅道は阿修羅の住まう世界で、修羅は終始戦い、争うとされます。苦しみや怒りが絶えないが地獄のような場所ではなく、苦しみに（きげつ）自らに帰結するところが大きい世界です。

畜生道は牛馬など畜生の世界で、ほとんど本能ばかりで生きており、使役されなされるがままという点からは自力で仏の教えを得ることの出来ない状態で救いの少ない世界とされます。

餓鬼道は餓鬼の世界で、餓鬼は腹が膨れた姿の鬼で、食べ物を口に入れようとすると火となってしまう餓えと渇きに悩まされます。他人を思わないために餓鬼になった例があり、旧暦7月15日の施餓鬼はこの餓鬼を救うために行われます。

地獄道は罪を償わせるための世界で、地獄のことです。

この六道世界より、観音菩薩の導きで救われるという観音信仰があり、その六つの世界に応じたそれを六観音とよび真言宗では、天道：如意輪（にょいりん）観音、人間道：准胝（じゆんてい）観音、修羅道：十一面観音、畜生道：馬頭観音、餓鬼道：千手観音、地獄道：聖観音とされています。

とうとうにんうん
騰々任運

騰々任運は、良寛が円通寺の国仙禅師の下で二十二歳の時から十数年間修業し、国仙禅師からいただいた印可状の中にある言葉です。

騰々とはくよくよせず意気高らかに生きること。任運とは運命に任せること。まだ起こりもしない先のことをあれこれ思い悩むより、「今を大事に生きなさい」という教えです。

人はとかくつまらないことに心を捕らわれがちになり、気にして心配して悩み、そんなことを繰り返します。しかし、「なるようになるさ」と運を天にまかせて大手を振って、いつもより少し大股で青空の下を歩いてみれば、きっと心も青空、元気が出てくるような気がします。

良寛は、晩年の自画像に「是は此れ誰そ大日本国国仙の眞子良寛」と大書しているので、国仙禅師はさぞやすばらしい師匠だったのでしょう。良寛は印可を受け取りますが印可を使うことはありませんでした。これは良寛が権威のようなそういうものから離れたところに生涯身を置いていたからだと思います。

国仙禅師の印可状

附良寛庵主

りょうかんあんしゅに ふうす
良寛庵主に附す

良也如愚道転寛

りょうや ぐのごと うだた ひろし
良や愚の如く道転 寛し

騰々任運得誰看

とうとうにんうん だれか みるを 得ん
騰々任運 誰か看るを得ん

為附山形爛藤杖

ため ふう さんぎょうらんとう つえ
為に附す 山形爛藤の杖

到处壁間午睡閑

いたるところ へまかん ごすい のど
到处 壁間に午睡 閑かなり

良よ、おまえは一見愚かそうに見えるが、そうではない。辿りついた仏道は既に広々とした所に出ている。あくせくせず、運を天に任せているが、そうしたことを誰がわかっているだろうか。私は今印可の一本の杖を与えよう、この杖を持って旅に出よ、どこに行こうとよし、ただこの杖を壁に立てかけておけ。昼寝をしても良い。

印可 (いんか)

印可とは、師がその道に熟達した弟子に与える許可のこと。その証として作成される書面は印可状と呼ばれる。いわゆる“お墨付き”のこと。禅宗では、悟りを開いたと認められた弟子の僧侶が、師の肖像を絵師に描いてもらい、師はその肖像の上に「偈文」という漢詩の形を取った説法をしたため、これを一種の卒業証書とした。

維摩の一黙、雷の如し（維摩の沈黙雷のごとし）

「維摩の一黙、雷の如し」は大乗仏教經典の一つである維摩經にあります。内容は中インド・バイシャーリーの長者ヴィマラキールティ（維摩）にまつわる物語で、維摩が病気なり、釈迦が舍利弗・目連・迦葉などの弟子達や、弥勒菩薩などの菩薩にも見舞いを命じましたが。みな以前に維摩にやりこめられているため、誰も見舞に行こうとしません。そこで、文殊菩薩が他の菩薩を引き連れ見舞いに行き、維摩と対等に問答を行い、最後に維摩は究極の境地を沈黙によって示したのが「維摩の一黙、雷の如し」です。

問答は、維摩が同席していた菩薩たちにどうすれば不二法門に入る事が出来るのか説明を促し、これらを菩薩たちが、対立するものには、それぞれ実体無く、無自性であり、空であるとして、分別したいずれにもとらわれてはいけなと、不二の法門に入る事を説明。最後に文殊菩薩が「すべてのことについて、言葉もなく、説明もなく、指示もなく、意識することもなく、すべての相互の問答を離れ超えている。これを不二法門に入るとなす」といい、我々は自分達の見解を説明したので、今度は維摩の見解を説くように促しましたが、維摩は黙然として語りませんでした。文殊はこれを見て「なるほど文字も言葉もない、これぞ真に不二法門に入る」と讃嘆しました。そして、このことは「維摩の一黙、雷の如し」と褒め称え、この問答にて、その場にいた並みいる五千もの菩薩たちは、「無生法忍」の境地に至ったということです。「無生法忍」とは、簡単に述べると「不生不滅」の空の真理に達したということです。

しかし、もしも、この問答でいきなり「沈黙」であったら、その「沈黙」が「維摩の一黙」程の深い意味を含まないのは明白です。それは、問答に参加した菩薩たちが、これでもか、これでもか、と「不二法門」を言葉で明らかにしていき、そして、もう回答が出尽くしたところで、文殊菩薩の回答があり、いよいよ、「ここぞ」と言う時に「維摩の沈黙」であったため、大いに意義を持てたわけですが。「単なる沈黙では無い、沈黙」、これこそが重要であり、単なる「言語道断」・「無分別」・「不二」・「無念無想」・「不思不観」であってはいけなと云うことです。この「単なる沈黙では無い、沈黙」とは、般若思想においても同様で、実体の否定は、「単なる否定では無い、否定」ということです。

不二法門は維摩經の特徴的なものといわれます。不二法門とは互いに相反する二つのものが、実は別々に存在するものではない、ということをお説いています。例を挙げると、生と滅、垢と浄、善と不善、罪と福、有漏と無漏、世間と出世間、我と無我、生死と涅槃、煩惱と菩提などは、みな相反する概念ですが、それらはもともと二つに分かれたものではなく、一つのものであるという。たとえば、生死と涅槃を分けたとしても、もし生死の本性を見れば、そこに迷いも束縛も悟りもなく、生じることもなければ滅することも無い。したがってこれを不二の法門に入ると云うことです。

慈悲（四無量心）

仏教といえば、慈悲の精神ですが、大乘仏教の言う慈悲というのは、龍樹りゅうじゆの『大智度論』に説かれている四無量心しむりやうしんのことではないでしょうか。

この四無量心というのは、悟りを開いた釈尊の心には、慈無量心、悲無量心、喜無量心、捨無量心という四つの無量な心があるというものです。これは大乘仏教以前からある考え方で、伝統的な説明では、「慈」というのは樂を与える。「悲」というのは苦を抜く。そして樂を与えられて、苦が抜かれた姿を見て「喜」び、あの人の苦を私が抜いてやったのだ、あの人に私が樂を与えてやったのだという、そういう私という思いを「捨」てるというのが捨です。

この「捨」は、上からの慈悲、エリート主義ではなく、傲慢ごうまんではない精神を説かれています。慈悲を行う人には、確かに、「捨」のない人、無我でない人がいます。また、慈、悲、喜、捨も、思想ではありません。思想としての理解ならば、何の社会貢献もありません。ですから思想ではなく、慈悲は体得し、社会へ実現していくことにあると言えます。

しかし、人は釈尊のように悟りを開くことのできない未熟者ですから、この慈悲喜捨が体現できる者は少なく、特に「捨」を体得することが出来る人はまずいないでしょう。私は、人は未熟で丁度よいと考えています。相手を思ってやったことに対し、少しぐらいあの人の苦を私が抜いてやったのだ、あの人に私が樂を与えてやったのだと思っても可愛いことのように感じます。それよりも、人に対し少しの思いやりを持ち、苦悩している人を見て自分の出来る範囲内で少しでも実行することの方が重要であり、この少しの積み重ね、出来ることの積み重ねが、釈尊の説く慈悲に繋がって行くのではないかと考えるのです。

龍樹りゅうじゆ：2世紀中ごろから3世紀中ごろのインド大乘仏教なかがん中觀派の祖。南インドのバラモンの出身。一切因縁和合・一切皆空を唱え、大乘經典の注釈書を多数著して宣揚した。著「中論頌」ちゆうろんじゆ「大智度論」だいちどろん「十住毘婆沙論」じゅうじゆうびばしゃろんなどがある。

大智度論だいちどろん：龍樹の著作とされる書で、『摩訶般若波羅蜜經』（大品般若經）の百巻に及ぶ注釈書である。初期の仏教からインド中期仏教までの術語を詳説しやうせつする形式になっているので仏教百科事典的に扱われることが多い。

大乘仏教：ユーラシア大陸の中央部から東部にかけて信仰されてきた仏教の分派のひとつ。自身の成仏を求めるにあたって、まず苦の中にある全ての生き物たち（一切衆生）を救いたいという心、つまり大乘の観点で限定された菩提心を起こすことを条件とし、この「利他行」の精神を大乘仏教と部派仏教とを区別する指標とする。

而二不二（ににふに）

「而二不二」は、後の半分だけをとって「不二」と呼ぶこともありますが、真言宗の中では、最も大切な言葉の一つです。

「而二不二」とは、「而二」と「不二」の二つの言葉がくっついたもので、而二とは、一つのを二つの面から見ることで、不二とは、二つの面があっても、その本質は「一」である、ということです。

一枚の紙を例にとって考えてみましょう。「紙には表と裏がある。」というのが「而二」にあたります。そして、「表と裏がそろって初めて一枚の紙になる。」と言うのが「不二」にあたります。つまり、紙には表と裏という二つの面があり、その両方があるからこそ紙が存在しているというわけです。

このような、表と裏のような、切っても切れない関係が「而二不二」です。世の中には表ばかりのものや、裏ばかりのものはありません。また、表のないものには裏はなく、裏のないものには表はありません。裏は表があるから生まれ、表も裏があるからこそ生まれてきたものです。

真言宗では、仏様の世界を大きく二つに分け、その二つの世界が「不二」であると説いています。一つ目の世界は、仏様の持つ「知恵」の徳を表す「金剛界」、もう一つは「慈悲」の徳を表す「胎蔵界」です。

「知恵」の世界と「慈悲」の世界、これら二つの世界は別々に描かれていますが、実際には一つに融合しているものです。つまり、だれか救いたいという気持ち（慈悲）があっても救う方法（知恵）を知らなければ救うことはできませんし、救う方法を知っていても、救いたいという気持ちがなければ、やはり救われません。

人間のお医者さんに例えると、病気の人を治したいという気持ちを持っていても、医学の知識や技術が不足していれば、正しい治療を行うことができませんし、どんなに腕のいいお医者さんでも、人を助けようという気持ちに欠けていれば結果は同じです。

「慈悲」を離れては「知恵」の徳はなく、「知恵」を離れては「慈悲」の徳は存在しません。このように、仏様の世界では、「知恵」と「慈悲」は「不二」なのです。

私たちが仏様をお手本に、より良く生きていくためには「知恵」と「慈悲」どちらの心も併せ持ち精進していくことが大切です。しかしながら、現代社会で問題となっている色々な出来事は、「知恵」を追い求めることを優先して、「慈悲」をおろそかにしているために起こっているものが多いように感じられます。

様々な情報や誘惑にふりまわされて自分を見失いそうになる世の中。合理的に効率を追いかけるあまり、いろいろなものを切り捨ててしまう世の中。一番最初に切り捨てられるのは、「〇〇のために」という「慈悲」の心なのかもしれません。しかしながら、このような時代だからこそ「慈悲」の心を大切にしなければならぬのではないのでしょうか。

一無位真人（いちむいのしんにん）

赤肉團上有一**無位真人**。常從汝等諸人面門出入。未證據者看看。

しゃくにくだんじょう いちむい しんにん あ つね なんじらしよにん めんもん しゅつにゆう いま しょうこ
赤肉團上に**一無位**の真人有り。常に汝等諸人の面門より出入す。未だ証拠せざる
ものは看よ看よ。

お互いのこの生身の肉体上に、何の位もない一人の本当の人間、すなわち「真人」がいる。いつでもどこでも、お前たちの眼や耳や鼻などの全感覚器官を出たり入ったりしている。まだこの真人がわからないものは、はっきり見届けよ。

人間は自分を見つめるとき、初めは実体的な自己の存在に何の疑いも持ちません。しかし、さまざまな問題に悩み、壁にぶつかって、さらに自己を掘り下げて見つめていくと、悩みや苦しみの原因はすべて自分の中にあると気がつきます。そこで、本当の自分とは何か、人間とは何か、という問題につきあたるのです。

臨濟禪師は、この真実の自己を「一無位の真人」と表現されました。

「無位」とは、一切の立場や名誉・位をすっかり取り払い、何ものにもとらわれな
いということです。「真人」とは、疑いもない真実の自己、すなわち真実の人間性の
ことで、誰でもが持っているものである。この真人は、単に肉体に宿るだけでなく、
人間の五官を通して自由自在に出入りしています。

人はさまざまな問題に悩み、壁にぶつかったときに、はじめは他に原因があると考え、
他を責めてしまいがちですが、それでは悩み苦しむ心は変わらず、心の平安はあり
ません。なんとかその苦しみから逃れようと、さらに自己を掘り下げて見つめてい
くと、悩みや苦しみの原因はすべて自分の中にあると気付くのです。

「ああ、これではいけない。自分はなんとつまらないことで思い悩んでいたのだら
う。」と気付いたその人が「一無位真人」。つまり、なんの欲望も無く、貴賤、貧富、
凡聖、男女、老若などの違いなど一切関係ない世界の中にある真実の人が「真人」で
あり、誰も皆、一人ずつそういった自分を持っているのですよ、そのことに気付きな
さい、という禪の教えです。

臨濟宗の教義は、いうまでもなく宗祖・臨濟禪師の挙揚した禪の宗旨を根本として
おり、その教えは、「臨濟録」に伝えられています。

「臨濟録」にみられる特徴は、如来とか仏といった既成の仏教用語ではなく、宗教
的人格をあらわす「人」という言葉を使っていることです。如来とか仏というと、ど
うしても人間よりも超越した存在のようにとらえてしまうことから、極力そうした用
語を避けています。

宗教的人格者とは、「人間とは何か」「人間はどうあるべきか」「どう生きるべき
か」を自分自身に引き寄せて、その真理をうなずきとる自覚の経験をした人であり、
臨濟禪師はこの宗教的人格者を「真人」、又はただの「人」と呼んでいます。

『山家学生式』(さんげがくしょうしき)

『山家学生式』は、伝教大師最澄が『法華経』を基調とする日本天台宗を開かれるに当たり、人々を幸せへ導くために「一隅を照らす国宝的人材」を養成したいという熱い想いを著述され、桓武天皇に提出されたものです

国の宝とは何物(なにもの)ぞ、宝とは道心(どうしん)なり。道心ある人を名づけて国宝と為(な)す。故(ゆえ)に古人(こじん)言(い)わく、徑寸十枚(けいすんじゅうまい)、是(こ)れ国宝にあらず、一隅(いちぐう)を照(てら)す、此(こ)れ則(すなわ)ち国宝なりと。古哲(こてつ)また云(い)わく、能(よ)く言(い)て行(い)うこと能(あた)わざるは国の師(し)なり、能(よ)く行(い)いて言(い)うこと能(あた)わざるは国の用(ゆう)なり、能(よ)く行(い)い能(よ)く言(い)うは国の宝(たから)なり。三品(さんぽん)の内(うち)、唯(ただ)言(い)うこと能(よ)わず、行(い)うこと能(よ)わざるを国の賊(ぞく)と為(な)す。乃(すなわ)ち道心あるの仏子(ぶつし)、西(にし)には菩薩(ぼさつ)と称(な)し、東(に)には君子(くんし)と号(な)す。悪事(あくじ)を己(おのれ)に向(むか)え、好事(こうじ)を他(た)に与(よ)う、己(おのれ)を忘(わす)れて他(た)を利(り)するは、慈悲(じひ)の極(きわ)みなり。

口語訳

国の宝とは何なのでしょう。国の宝とは正しい道を求める心です。この道心ある人を名づけて国の宝と言(い)うのです。ゆえに先の世の哲人が言(い)うには、「3cmの宝石10個、これは国の宝ではありません。世の1隅を照らす人こそすなわち国の宝なのだ」と。古代の哲人がまた言(い)うには、「良く発言する事は出来るが行動しないのは国の師。良く行動して発言しないのは国に有用な人だ。良く行動し良く発言する事は国の宝だ、三種のうち、ただ発言もしない行動もしないのは国の賊である」と。すなわち道心ある仏の弟子を、印度では菩薩と名づけるし、中国では君子と言(い)います。悪い事は自己に向け、好(よ)い事を他人に与(よ)う、自己を忘(わす)れて他人に利益を与(よ)えるのは、慈悲深い事の極(きわ)みです。

道心とは道を修めようとする心、仏教においては仏道を究めようとする心です。この道心をもって生活することができる人が国の宝であると示されています。

例えば、自分の仕事を自己に与えられた天命と心得て、打ち込む人こそ道心の持ち主でしょう。どんな仕事でも、このような人は限りない喜びを仕事の中に見だし、生き甲斐を仕事の中に感じる事が出来るに違いありません。「自分という人間はいかにあるべきか」を追究し、自己の理想や目標を定め、その実現に向かって努力すること、そのような人生の道を歩む心といえるでしょう。

このような人が国中に充満すれば、国は栄え、社会は浄化され、物も心も豊かになる世界が実現します。したがって、伝教大師の御心は、一個人の完成のみならず、道心ある人々を育成し、国全体、ひいては世界中に及ぶことを願っているのです。

忘己利他（もうこりた）

忘己利他は、自分を捨てて、他に報いることです。これは天台宗宗祖伝教大師最澄の山家学生式に「己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」からきています。そして、その前に「好事を他に与え、悪事を己れに向え」とあります。これは、いいことは人にあげ、悪いことはみんな自分に引き受け、自分の幸せは忘れ、人の幸福のために尽くすのが慈悲の最高のものだということです。

伝教大師・最澄は日本天台宗の開祖です。その最澄が、いまから約 1200 年前に、小乗仏教の戒律を捨て、大乘仏教の戒律だけをとることを決意したときに、その理論づけとして書きあらわしましたものが「山家学生式」です。

人間は性として、どうしても自分中心に物事を考えてしまうことがあります。もっと欲しい、こうして欲しい、とまわりに望むことが多くなりがちで、我欲が先立ちます。自分のことは後にして、まず人に喜んでもらうことをする。そこに幸せがあるのだということは、口で言うのは簡単ですがそれを実践することは、相当に大変なことです。しかし、この意味を十分に理解し実践出来たならば、本当の幸せをつかむことが出来るかもしれません。

忘己利他は、読み方の区切りが悪いと「もう、こりた」という読み方になってしまいます。いくら自分が他者に尽くしても、それが相手に伝わらないとガッカリしてしまいます。それは自分の心の何処かに、相手に対し見返りを求めている心があるからです。また、親切の押し売りや相手の事を考えない行動は、自分が良かれと思っても相手にとっては大迷惑なことになってしまいます。これらを考えずに、自分勝手にもう懲りた、もうするものかと思ってしまうのが人間ですが、相手の事を考え「もう懲りた」ではなく「忘己利他」を忘れないで行きたいものです。

山家学生式

国宝とは何物ぞ、宝とは道心なり。道心あるの人を名づけて国宝となす。故に古人言く、径寸十枚これ国宝に非ず、一隅を照らす、是れすなわち国宝なりと。古哲また云わく、能く言いて行ふこと能わざるは国の師なり。能く行いて言ふこと能わざるは国の用なり。能く行い能く言ふは国の宝なり。三品の内、ただ言ふこと能わず、行ふこと能わざるを国の賊と為すと。乃ち道心あるの仏子を、西には菩薩と称し、東には君子と号す。悪事を己に向え、好事を他に与え、己を忘れて他を利するは、慈悲の極みなり。

一隅を照らす運動「実践3つの柱」

- 1 生命（いのち）：あらゆる命に感謝しよう
- 2 奉仕（ほうし）：ありがとうの心で行動しよう
- 3 共生（きょうせい）：地球に優しい生活をしよう

天上天下 唯我独尊 (てんじょうてんげ ゆいがどくそん)

お釈迦様の言葉に「天上天下 唯我独尊」という言葉があります。

ふつう、唯我独尊というと‘世の中で自分ほどえらいものはいない’という意味で使われますが、本来はそうではありません。

それでは、本当はどういう意味なのでしょう。

お釈迦様のいう唯我独尊とは、この世の中で、みんなそれぞれにお互い自分というものは、かけがえのない尊い存在であり、かけがいのない尊い命であるということです。

‘みんなちがって、みんないい’ お互いにみんなそれぞれ尊い存在です。お互いの違いを認め理解し合うことが大切です。

誰でも自分が一番大切です。だから、他人を押しつけてでも自分を主張し保とうとします。しかし、押しつけられた他人は、^{わずら}煩い・悩みが増すでしょう。これでは安んずることにはなりません。誰でも自分が一番大切なように、他人も自分が一番大切です。自分が真実に成り立つことは、他人をペシャンコにして自分を主張することではなく、他人を真に成り立たせることによって、自分が真に成り立つことです。又、他人を真に成り立たせることは、自分をペシャンコにして他人をたてまつることではなく、自分を真に成り立たせることによって、他人を真に成り立たせることです。このような自分と他人のあり方を「自他不二」といいます。仏心とはまさに「自他不二」であり、その境界こそ、あらゆるものを「安んずる」ことができるのです。即ちあらゆるものを「安んずる」ことによって、仏は仏たり得るといえます。

「天上天下」とは全世界を意味します。それは時間的・空間的な全世界で、「イツデモ、ドコデモ」ということです。仏心とは、いつでもどこでも自他不二の心が持ち続けられてあることです。その全世界の中心としての自己—自他不二の仏心—において、「唯我独尊」と示されるのであります。つまり「いつでもどこでも」自分が大切などと同じように、あらゆる生きとし生けるものを大切に—それが「天上天下唯我独尊 ^{さんがいはいくがとうあんしん}三界皆苦我当安之」のころであります。そういう「私」の尊さは私1人だけでなく、すべての人、一人ひとりがそうであり、一人ひとりが尊いのです。『阿弥陀経』に「青色青光 白色白光」と説かれているのも、このことを意味しています。

しかし、「私にそう思えといわれてもムリだ」と言われるかもしれません。「あなたに、私に、そう思え」というのではなく、仏さまが、私を、あなたを、そのように思っていて下さる—そういう仏心に包み込まれている私を知らされることであり、それが「本願を聞く」ということです。そう思えぬままに「唯我独尊」とされている私であります。

号（愚禿・狂雲子・大愚）

号（ごう）とは、名や字以外に人を呼ぶ際に使われる称号。例えば、李白は、名が白、字が太白、別号が青蓮居士である。蘇東坡（蘇軾、別号：東坡居士）のように号での方が有名な人物もいる。名や字と異なり、自身で名付けたり、他人によって名付けられる。

愚禿＝親鸞（しんらん） 1173年5月14日生れ？

親鸞は、鎌倉時代初期の日本の僧である。浄土真宗の宗祖とされる親鸞は、法然を師と仰いだ。小豆が好きで、妻の恵信尼との間に4男3女の7子をもうけたという説があるが、すべてが恵信尼の子ではないとする説もある。親鸞は自己を愚禿と号した。「すでに僧にあらず俗にあらず、このゆへに禿の字をもて姓とす」といつている。承元元年、彼の三十五歳のとき、法然ならびにその門下は流罪の難にあった。親鸞もその一人として僧侶の資格を奪われて越後の国府に流された。かくして、すでに僧にあらず、しかしまた世の生業につかぬゆえ俗にあらず、かくして禿の字をもって姓とする親鸞である。しかも彼はこれに愚の字を加えて自己の号としたのである。愚は愚癡である。すでに禿の字はもと破戒を意味している。かくして彼が非僧非俗破戒の親鸞と称したことは、彼の信仰の深い体験に基づくのであって、単に謙遜のごときものではない。それは人間性の深い自覚を打ち割って示したものである。90歳で亡くなる。

狂雲子＝一休宗純（いっきゅうそうじゅん） 1394年2月1日生れ

狂雲子以外に瞎驢（かつろ）、夢闍（むけい）などと号した。

室町中期の臨濟宗の僧。一休さん。諱（いみな）は宗純、号は狂雲。一休は字（あざな）。京都大徳寺の住持。自らを狂雲子と称し、戦乱の世を生きた狂風・破戒の僧侶である。男色はもとより仏教の戒律で禁じられていた飲酒・肉食や女犯を行い盲目の森侍者という側女や岐翁紹禎という実子の弟子がいた。父は後小松天皇とも云われ、母は一休が生まれる直前に天皇暗殺の疑いをかけられ宮中を追放された。以来、後小松天皇と親子の名乗りを上げることは生涯無かったと伝えられている。88歳で亡くなる。

大愚＝良寛（りょうかん） 1758年11月2日生れ

良寛は、江戸時代後期の曹洞宗の僧侶、歌人、漢詩人、書家。俗名、山本栄蔵または文孝。号は大愚。良寛は「子供の純真な心こそが誠の仏の心」と解釈し、子供達と遊ぶことを好み、かくれんぼや、手毬をついたりしてよく遊んだという。名書家として知られた良寛であったが、高名な人物からの書の依頼は断る傾向があったが、子供達から「凧に文字を書いて欲しい」と頼まれた時には喜んで『天上大風』の字を書いた。また戒律の厳しい禅宗の僧侶でありながら般若湯（酒）を好み、良寛を慕う民と頻りに杯を交わした。また弟子の貞心尼に対してほのかな恋心を抱いていたといわれている。73歳で亡くなる。

即身成仏（そくしんじょうぶつ）

即身成仏は、仏教で人間がこの肉身のままで究極の悟りを開き、仏になることです。即身成仏の思想は、主に真言密教の教義であり、真言宗において説かれる。空海の『即身成仏義』により確立され、また天台宗・日蓮宗においても『法華経』に基づき説かれています。

即身仏（修行者が瞑想を続けて絶命し、そのままミイラになること）と混同されがちですが、即身仏と即身成仏は全く別物であり、違いは「成仏」は生きている状態で悟る事です。

即身成仏を開くためには、日常生活の枠から逸する必要がある一定以上の修行が必要とされ、時には比叡山の千日回峰行^{ほうぎょう}のように限りなく死に近接することもあります。これらの修行の面を重視したのが天台・真言など密教や山岳信仰の流れを汲む修験道です。修験道では修験者（山伏）が白装束^{しろしやうぞく}（古来の日本では死装束でもあった）を纏って修行するなど死を前提とした点での即身仏と混同されやすい由縁もある。背景には擬死再生の思想があり、山伏の籠もる深山は山中他界と観念されていたのです。

山伏は一種の他界から帰還する（＝蘇る）ことによって超人的な力（法力）を獲得すると考えられ、平地民の間では天狗のイメージのように畏怖^{いふ}の対象ともなっていました。禅宗の間でも只管打坐^{しかんだざ}という修行が知られています。

仏教は、菩薩となる事、すなわち成仏を最終目標とし、修行を重ね、さまざまな事象に関する悟りを開く事によって、菩薩への道を歩み続けて行く求道の宗教です。精神の高揚を求めて荒行をする宗派もありますが、荒行は悟りを開く為の方法として、それぞれの宗派で考え出された修行法の一つで、必ずしも必要な行というわけではなく、それをやったからと言って必ず悟りを開けるというものでもありません。

修行をするにあたっては、通常、出家して修行に専念します。それは、通常の日常生活の中では、さまざまな邪念が存在したり、雑多な事に時間を取られたり、気に掛けなければならない事ができたりする為、修行の妨げになるからです。しかし、たまに、高度な精神的志向性を持ち、日常の生活をしながら修行を積んでいる効果が在って、それにより悟りを開き、そういった事を積み重ねているうちに、菩薩のレベルに達する人が居ます。そういった、出家しないで普通の社会生活をしている中に居ながら、菩薩となったケースを、「そのままの生活をしながらの成仏」という事で、即身成仏と表現する、という説もあります。

私は、人には皆、自分の中に仏心があると思います。この仏心が人に対する思いやり、やさしさ、愛、慈悲ならば、それは仏の道に通じそれが成仏であると思うのです。

成仏の考えは、仏教の根底にある考え方です。その上に、弘法大師は『即身』という概念を加えます。はるか長い修行（菩薩行）を積み重ね、一步でも仏に近づけたらという思いは、どなたもお持ちだと思います。でも、今の自分の中にあるのなら、近づくのではなく『目覚める』ことができるなら、それはすばらしいことだと思います。

高野山真言宗（こうやさんしんごんしゅう）

高野山真言宗は、平安時代初頭に弘法大師（空海）が入唐し、唐（中国）・長安（西安市）の青龍寺^{けいりか}で恵果から密教を学び、日本に帰国後、開いた真言宗の一宗派。総本山は高野山金剛峯寺。別称として、高野宗・高野派。寺号の金剛峯寺の金剛峯の名称は「金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経」^{こんごうぶろうかくいつさいゆがゆぎきょう}の最初の3文字（金剛峯）を引用して、空海が名付けました。

真言宗は、弘法大師空海が平安時代初期に大成した真言密教の教えを教義とする教団です。真言密教の「真言」とは、仏の真実の「ことば」を意味していますが、この「ことば」は、人間の言語活動では表現できない、この世界やさまざまな事象の深い意味、すなわち隠された秘密の意味を明らかにしています。弘法大師は、この隠された深い意味こそ真実の意味であり、それを知ることのできる教えこそが「密教」と述べています。それに対して、世界や現象の表面にあらわれている意味を真実と理解している教えを「顕教」^{けんぎょう}と呼んでいます。「顕教」とは、声聞・縁覚^{しょうもん えんかく}の教え（二乗）と法相宗^{ほっそう}、三論宗^{さんろん}さらに天台宗、華嚴宗^{けごん}などの大乘仏教を指しています。

密教と顕教の違いは、いくつか指摘できますが、もっとも根本的な違いは、この隠された秘密の意味を知る修行のあり方^{しゅうほう}（修法）にあります。真言密教の修法を三密加持^{さんみつかじ}とか三密瑜伽^{さんみつゆが}などと言いますが、精神を一点に集中する瞑想（三摩地^{さんまじ}）のことです。特徴としては、仏（本尊）の身（み）と口（くち）と意（こころ）の秘密のはたらき（三密）と行者の身と口と意のはたらきとが互いに感応（三密加持）し、仏（本尊）と行者の区別が消えて一体となる境地に安住する瞑想を言います。弘法大師は、このあり方を仏が我に入り我が仏に入る、という意味で「入我我入」^{にゅうががにゅう}と呼んでいます。弘法大師は、顕教にはこの入我我入とも言うべき瞑想が欠けていると述べています。もっとも、平安時代後期から鎌倉時代にかけて登場する新仏教については、真言密教の教学や修法の影響を受けていると考えられますので、一概に顕教には瞑想が欠けているとは言えません。もう一つ顕教との違いをあげると、仏や菩薩についての理解があります。顕教の仏や菩薩などは、さとりを開いたり、さとりを求める「人」ですが、密教の仏や菩薩たちは、宇宙（法界）の真理そのもの（法）です。その「法」が身体的イメージとしてとらえられているのが仏や菩薩なのです。密教の仏や菩薩たちを法身仏^{ほっしんぶつ}と呼ぶのはそのためです。

また、真言宗における、中心とされる仏様は、『大日如来』で、正式な名称は『大毘盧遮那仏』^{だいびるしゃなぶつ}といます。仏教ときいてまず頂点に思い浮かべる仏様といえば「お釈迦様」ですが、真言宗はお釈迦様を中心とはしていません。上にも書きましたが密教と顕教における違いがここに大きく現れています。

大日如来は宇宙の根源仏、この世に存在するものすべてでも言い切れない『全て』がこの大日如来と繋がっており、お釈迦様もこの世で仏教の説法を説くために大日如来が姿を変えて現れた姿「応身物」^{おうじんぶつ}とされています。

印可（いんか）

印可とは、師がその道に熟達した弟子に与える許可のこと。その証として作成される書面は**印可状**と呼ばれる。いわゆる“お墨付き”のこと。禅宗では、悟りを開いたと認められた弟子の僧侶が、師の肖像を絵師に描いてもらい、師はその肖像の上に「偈文」という漢詩の形を取った説法をしたため、これを一種の卒業証書とした。

親鸞（浄土真宗の印可の考え）

他力本願の信心は、禅宗の悟りとは若干ニュアンスが異なります。禅宗の悟りは師匠の印可をもって公に認められ、師匠から弟子へ「**教外別伝・不立文字・以心伝心**」と伝えて行くものでありますが、そこに師匠の印可を必要としているようでもあります。しかし、法然上人や親鸞聖人の教えは、やはり同じく「不立文字・以心伝心」ではあり、人から人へと引き継がれて来たものであり、今後も引き継がれて行くものだと思いますが、禅宗における印可と言うような約束も考え方もありません。

一休宗純の印可

一休宗純の印可について有名なエピソードがあります。二十七歳になった年の五月二十日のこと、真夜中、闇夜に琵琶湖岸の舟の上で座禅をしていると、カラスの一声がありました。これを聞いて長年の疑問が突然とけて、大悟の境地に達したことを師の華叟に告げ、これを聞いた華叟は一休に印可を与えましたが、一休宗純はこれを受け取らなかったといひます。

良寛の印可

良寛庵主に附す

良也愚の如く

道転た寛し

騰々任運

誰か看ることを得む

為に附す山形爛藤の杖

到る処の

壁間

午睡閑かなり

良よ、おまえは一見愚かそうに見えるが、そうではない。

辿りついた仏道は既に広々とした所に出ている。

あくせくせず、運を天に任せているが

そうしたことを誰がわかっているだろうか

私は今印可の一本の杖を与えよう

この杖を持って旅に出よどこに行こうとよし

ただこの杖を壁に立てかけておけ

昼寝をしていても良い

良寛の印可は、師の国仙和尚からいただき、晩年の自画像に「是は此れ誰そ大日本国国仙の眞子良寛」と大書しているのです、さぞやすばらしい師匠だったのでしょう。

一休は印可を受け取らず、師に対し無礼ではないかと心配しますが、良寛は印可を受け取りますが印可を使うことはありませんでした。良寛も一休も権威のようなそういうものから離れたところに生涯身を置いていたと思います。

いろは歌は、全ての仮名の音を使って作られている歌で、手習い歌の一つ。七五調四句の今様(いまよう)形式になっています。手習い歌として最も著名なものであり、近代に至るまで長く使われていました。そのため、全ての仮名を使って作る歌の総称として使われる場合もあります。また、平安時代末期に流行した『涅槃経(ねはんきょう)』の「諸行無常 是正滅法 生滅滅已 寂滅為樂」を表すと言われています。

いろはにほへと	ちりぬるを	色は匂へど	散りぬるを
わかよたれそ	つねならむ	我が世誰そ	常ならむ
うみのおくやま	けふこえて	有為の奥山	今日越えて
さきゆめみし	ゑひもせず	浅き夢見じ	酔ひもせず

色は匂へど 散りぬるを 諸行無常(しょぎょうむじょう)

花は爛漫と咲き乱れていてもやがて散ってしまうように、人にも寿命があり、すべての存在はうつりかわる。我が世と青春と肉体を謳歌していても、月日のたつのは実に早いものであるという諸行無常を示します。

我が世誰そ 常ならむ 是生滅法(ぜしょうめつぼう)

この世に存在するものは生滅する法(真理)です。釈尊は「一切のものは無常である。諸法は無我である。故にすべての存在しているものには永遠不滅なるものなどは内在しない」と示されています。

有為の奥山 今日越えて 生滅滅已(しょうめつめつひ)

「有為」自体は「形あるものと形のないもの」、つまり「愛や憎しみといった形のないものまで含めてこの世に存在するすべてのもの」という意味ですが、「有為の奥山」というと、そんないろいろなものが渦巻く人生を比喻する言葉になります。「そんな険しい人生を、今日もまた1つ越えて」ともとれます。また、有為とは為す有りとも読めます。人間のはからいとは「人生とはどうしたって有為なんだ」というのでしょうか。

浅き夢見じ 酔ひもせず 寂滅為樂(じゃくめついらく)

寂滅をもって樂と為すー有為の奥山を越えて見たならば「浅い夢のようなもの」であり「酔っぱらっていた」ようなものである。「寂滅」とはやすらぎということです。我が滅しられ、煩惱の火が吹き消えた状態で、やすらぎ、悟りの境地をいいます。一切のものごとへのこだわりや、とらわれの心がなくなった状態です

三法印 三法印は、一切皆苦を加えて四法印とする場合もある

三法印とは、「諸行無常印」「諸法無我印」「涅槃寂靜印」の三つを言います。（時にはこれらを略称して「無常印」「無我印」「涅槃印」ということもあります。）三法印の「印」とは、印章（しるし）という意味です。従って、三法印（さんぼういん）とは、「三つの仏教を特徴づける真理」と言う意味です。この三法印の特徴を持っているものが仏教であり、無ければ仏教ではないということです。この三法印に、「一切皆苦」を加えて四法印（しほういん）とよぶこともあります。

【諸行無常】（しよぎょうむじょう）

この世に生起するあらゆる現象は、常に変化し、流転してやむことなく、刹那の単位で移り変わっていくということ。（行とは因と縁によってつくられたもの、現象している一切のもの）

【諸法無我】（しよほうむが）

いかなる存在も、永遠不変の実体などはないのだという意味。（諸法とはここでは存在、我とは恒常で変化しない実体の意）

たとえば、「わたし」と思い込んでいるこのわたしも、「わたし」としてとらえられるような実体は存在しない。この「わたし」を含め、世の中のすべてのものは、ただ一つで存在するものはなく、縁に依って仮に和合した姿であり（縁起）、実体を伴ってあるように見えるが、実際には一刹那ごとに生まれたり滅したりを繰り返して（刹那無常）、我がとか我がものというけれど、そんなものは何一つないと教えるのが「諸法無我」。

【涅槃寂靜】（ねはんじゃくじょう）寂滅為樂（じゃくめついらく）

涅槃とは煩惱の炎が吹き消された状態、安らぎ、悟りの境地をいう。「諸行無常」、「諸法無我」の教えによって、人間の心から貪りと怒りと愚痴がとり除かれた時、そこに初めて涅槃寂靜の状態が生まれるとし、仏教は涅槃寂靜に到達することを目標とする。

諸行無常

仏教の最も基本となる三法印の一つに「諸行無常^{しよぎょうむじょう}」の教えがあります。これは「この世の現実存在はすべて、すがたも本質も常に流動変化するものであり、一瞬といえども存在は同一性を保持することができなく、この現象世界のすべてのものは生滅して、とどまることなく常に変移しているということである。」と言います。

諸行無常と言えば、『平家物語』の冒頭の一節として広く知られた言葉で「祇園精舎^{ぎおんしやうじや}の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹^{さらかうじゆ}の花の色、盛者必衰^{しょうじやひつすい}の理をあらはす。驕れ

る者も久しからず、唯^{ただ}春の夜の夢のごとし。猛^{たけ}き者もついには滅^{ひとえ}びぬ、偏に風の前の塵^{ちり}に同じ。」と、滅びゆく姿のはかなさの代名詞のように使われています。また、日本人の美意識の代表とされるものに、桜の花や紅葉、雪などがありますが、これらはすべて、はかないから美しいのであり、そこにはこの仏教の無常観が流れているといわれます。

この「無常」。往々にして私たちは一面だけでとらえがちなのです。それは、雪が溶けたり、紅葉や桜が散ったりといった、滅びの場面でだけ、無常観をいただきやすいということなのです。

でも実は、これだけではないのです。もっと咲いていてほしいのに、いずれ散ってしまうのはもちろん無常です。ところが、寒々とした木々の早春の枝先が、小さな蕾を結ぶのも無常。蕾が少しずつふくらんでいくのも無常。そして誇らしげに花開くのも無常。

人間で言えば年老いるだけが無常ではなく、このまま、かわいいままでいてほしいと願うようなあどけない幼子が、成長して少年になり、やがて青年になっていく。これも無常。楽しいこと、いいことはいつまでも続かないけれど、逆に、どんなにつらく苦しいことも、ずっとそのままではいない、やがて必ず苦しみ悲しみから立ち直っていく。これも無常。すべてのものは変化してやまないという真実が、「無常の理」なのです。そして、この諸行無常の世にありながら「いつまでも変わらない」ことにこだわりすぎる私たちの心が「苦しみ」を生む一つの大きな原因だと、お釈迦さまは説かれているのです。

諸々の事象は過ぎ去るものである。

怠ることなく修行を完成させなさい。

今から約2500年前、沙羅双樹の下でお釈迦さまはそう遺言され、無常の理を自らの老いと死をもって示して、涅槃に入られました。

2月15日のことと伝えられています

一切皆苦（いっさいかいく）

一切皆苦とは、仏教における四法印の一つです。初期の経典に「色は苦なり」「受想行識も苦なり」としばしば説かれています。これを「一切皆苦」と言い、「苦」の原語は、パーリ語のドゥッカ（dukkha）で、これは単に、日本語の「苦しい」という意味だけではなく、「空しい、不満、不安定（自分の思い通りにならない）」といった幅広い語義を持ちます。それゆえ、「一切皆苦」は「すべての存在は不完全であり、不満足なものである」と言いかえることもできます。不完全であるがゆえに、常に変化して止まることがない。永遠に存在するものはなく、ただ変化のみが続くので「空しい」というふうに、「苦」という一語で様々な現象が語られます。

そのため、仏教では「苦」とは、解りやすく言うと「自分の思い通りにならない」ということになります。

この「苦」とはまず、生まれてきたこと。これは選択の余地はありません。老いること。これもどうしようもありません。病むこと。好きで病気になる人はいないでしょう。死ぬこと。すべての人に必ずおとずれます。以上の生老病死の四つの避けられないことを四苦といいます。

さらに、どんなに愛する人とも別れる時が来ること（愛別離苦-あいべつりく）、どんなにいやな人でも顔をあわせなければならないこと（怨憎会苦-おんぞうえく）、求めても思い通りにならないこと（求不得苦-ぐふとくく）、人としての肉体・精神があるために生まれる苦しみ（五蘊盛苦-ごうんじょうく）の四つを、生老病死の四苦に加え「八苦」といいます。「四苦八苦」という言葉はここからきています。

[苦]をうけいれること

なんだか悲観的な話しになってきてしまいました。上にあげた苦は自分ではどうにもならないことなのです。それなのに、どうにかしたい、どうにかしよう、と思うと文字通りの「苦」になってしまいます。それにしてもどうして世の中これほどまでに思い通りにならないことばかりなのでしょう。

それは、すべてのものは移ろいゆく、諸行無常であるがゆえなのです。すべての存在、あらゆる現象は生じ、そして滅する、私達もその流れのなかにあります。ですから自分ではどうしようもないことばかりなのです。「諸行無常」を正しく認識し、「何事も自分の思い通りにはならない」ということをうけいれることが大切です。すべてのものは生じ、変化し、滅するというのに、私達は目の前のものに執着したり、「自分」にとらわれたりしてしまいがちです。

「人生をあきらめましょう」といっているようなニュアンスにとられるかもしれませんが、「あきらめる」という言葉には「諦める」のほかに「明らめる」と書いて「物事の事情・理由をあきらかにする」という意味もあります。「人生を諦める」のではなく、仏の教えを正しく認識し「人生を明らめる」ことにより、自由になることができます。

生死事大（しょうじじだい）

生死事大とは、生き死の問題は重大であって、それをいかに超越するかが最大事であることです。生死を繰り返す、この世の迷いを捨てて悟りを開くことは、いま生きているこの時しかなくて、最も大切なことであるといえます。生死事大は仏教、特に禅宗の語です。

禅宗の僧堂では、毎日欠かすことなく、朝夕の時を告げたり、法要の知らせとして木板（もっぱん）と言う法具を撃ち鳴らします。この木板の表には「生死事大」の墨書があり、仏教者としての真実を求める最重要課題である生死の問題を明らかにすべき事を投げかけられています。

道元禅師の主著「しょうぼうげんぞう正法眼蔵」の抄録しょうろくともいえる「しゅうしやうぎ修証義」の最初に「生（しょう）を明らめ死を明むるは仏家一大事のいんねん因縁なり、生死（しょうじ）の中に仏あれば生死なし、ただ生死即ち涅槃と心得て、生死として厭あうべきもなく、涅槃として欣あう（ねがう）べきもなし、是こゝの時初めて生死を離るる分あり、唯一大事の因縁ときゅうじん究尽すべし」とあります。

生死の問題は人生そのものの一大の命題であり、生死を明らかにすることは、すなわち迷い、煩惱を超脱し悟りの境地そのものを築くことに他ならないのです。

生とは何か、死とは何か、人間如何いかに生きるべきか、その究明こそ人として最も大事な課題なのです。だからこそ、その究明に時間を惜しんで修行すべきだと言う激励の言葉として「生死事大」の語があり、その語に続く言葉として「光陰可惜」（こういんおしむべし）があり、さらに「無常迅速 時人不待」（むじょうじんそく ときひとをまたず）の語がつづくのです。

朱子学で知られる朱喜しゆきの「少年易老学難成 一寸光陰不可輕」（少年、老いやすく、学なり難し、一寸の光陰 軽んず可からず）の句は有名である。また詩聖・陶淵明とうえんめいの「歲月不待人」（歲月、人を待たず）の語がその句と一つに重なり、織りなして、生死事大 光陰可惜無常迅速 時人不待の語となり、禅門では今も大事な言葉として、修行者を木板のコーン、コーンの響きを通して朝晩、策励さくれいし続けているのです。

生まれて死ぬ一度の人生をどう生きるか、それが仏法の根本問題です。長生きすることが幸せでしょうか。そうでもありません。短命で死ぬのが不幸でしょうか。そうでもありません。問題はどう生きるかなのです。この世において、生まれたものは死に会ったものは別れ、持ったものは失い、作ったものはこわれます。時は矢のように去っていきます。すべてが「無常」です。無常ならざるものはあるでしょうか。

周利槃特（しゅりはんどく） 愚路とも呼ばれた。

茗荷^{みょうが}の名前の元になったお坊さんは、周利槃特（しゅりはんどく）という。周利槃特は、天竺（インド）の北部に生を受け、兄の摩河槃特（まかはんどく）と共にお釈迦様に弟子入りした。兄は賢く、お釈迦様の教えをよく理解し、深く仏教に帰依したが、弟の周利槃特は物覚えが悪く、自分の名前すら覚えられなかった。そのため、托鉢に出かけても、お釈迦様の弟子として認められず、乞食坊主扱いをされ、お布施を貰うことが出来ない。お釈迦様はこれを憐れみ、「周利槃特」と書いたのぼりをこしらえて「明日からこれを背負って托鉢に行きなさい。もし名前をたずねられたら、これでございますと、のぼりを指差しなさい。」といわれた。次の日から托鉢の時にのぼりを背負っていくと、人々はお釈迦様の書かれたのぼりをありがたがり、たいそうなお布施をいただくことができるようになったそうである。

さて、兄は、物覚えの悪い弟に、何とかお釈迦様の教えを覚えさせようと手を尽くしてやるが、弟の方は、朝に覚えていたものを昼には忘れてしまう。周利槃特は、自分のおろかさに涙を流して途方にくれた。それを見ていたお釈迦様は「自分が愚かであると気づいている人は、知恵のある人です。自分の愚かさを気づかないのが、本当の愚か者です。」といわれ、ほうきを周利槃特に渡して「ごみを払おう、あかを除こう」と唱えて掃除をしなさいと教えた。

その日から周利槃特は、雨の日も、風の日も、暑い日も、寒い日も、毎日「ごみを払おう、ちりを除こう」と唱えながら掃除をし続けた。やがて「おろか者の周利槃特」と呼ぶ人はいなくなり、「ほうきの周利槃特」と呼ばれるようになった。そして数十年経ち、周利槃特は自分の心のごみやあかを全て除き、阿羅漢と呼ばれる聖者の位にまでなったのである。お釈迦様は、「悟りを開くということは決してたくさん覚えることではない。わずかなことでも徹底すればよいのである。周利槃特は徹底して掃除をすることでついに悟りを開いたではないか。」と大衆の前でおっしゃった。その後、周利槃特が亡くなり、彼のお墓にあまり見たこともない草が生えてきた。彼が自分の名を背に荷（にな）ってずっと努力し続けたことから、この草は「茗荷（みょうが）」と名づけられたということである。

自明灯（じみょうとう）

お釈迦さまが死に臨んだ際、弟子たちは、誰もたいへん嘆き悲しみました。

「お釈迦様が亡くなられたら、私たちはどうやって、いったい何にすがって生きて行けばいいのでしょうか！..」

集まった暗い顔の弟子たちに、お釈迦さまは、「自明灯、法明灯」という「自らを灯明とし、法を灯明とせよ」をお伝えになりました。

これは、明かりのない暗い道を、自ら照らす灯りとなれという意味で、意識して常に自分の心に明かりを灯すように心がけなさい、自分の足できちんと歩き、自らの心の中に灯を灯しなさいということです。

自分の心の中に灯がない人は、自分自身を照らせないことはもちろん、他の人を照らすことはできません。人様の灯りに頼ろうとせず、自ら進んで灯してあげよう、という気持ちが大事だと思います。

心はどういうわけか放っておくと、暗い考えに偏ってしまいます。ですから、意識して常に自分の心に明かりを灯すように心がけることが必要です。

そんな感動の灯が、次から次へと点火されて行くことを「灯々無尽」と言います。

これからの人生、周囲から多少の助けはあるかもしれないが、自ら歩む道は自分で照らしていかななくてはならないと思います。

そんなに努力したわけでもないのに、何故かトントン拍子にうまく行く時があります。また逆に、必死に血の出るような努力をしても、全くうまく行かず、どんどん後退してしまって、落ち込んでしまうような時期もあります。

その波は、ある時は大きく、またある時は小さく、振幅を繰り返し、全体として大きくうねりながら、人生模様を刻み込んで行きます。たとえ失敗して過ぎ去った日々があったとしても、それを後悔し悩んでみたところで、覆水は盆に返ることは決してありません。重要なことは、過去にすがり執着するのではなく、これから先、「何をしようとしているのか？」、ということではないでしょうか。失敗したり挫折したときにこそ、それをバネに変えれば良いのです。

シェークスピアの「過去のことはプロローグにすぎない」という言葉は、今日の、想像を絶するような激変する時代には、とりわけ当てはまる言葉かも知れません。あの時は良かった。あの頃は幸せだった..。そんなことばかり思っているのは、現在のあなた自身が、その頃に比べて、「充実していない」、「つまらない」、「何もない」等々と、現在の自分を否定的に見つめ、自分自身の心を閉ざしているからではないでしょうか。過去の栄光にすがらなければいけないほど充実していない自分自身の「現在の姿」こそが問題なのだと思います。もう一度、頑張っただけ来た自分自身に、改めて暖かく優しい眼差しを向けてみましょう。せめて、「あの時は良かった」、けれど、「今の自分も素晴らしい！」。「あの頃は幸せだった」、でも、「今も十分幸せなんだ」。そう心から思える自分でありたいものです。

随处作主 (ずいしよにしゅとなる) <臨濟録>

随处に主となる

この語は臨濟宗の開祖である臨濟義玄^{ぎげん}禪師が修行者に対して諭^{さと}された言葉で「随处に主となれば立処(りっしょ)皆真なり」の一句である。いづどこにあっても、如何なる場合でも何ものにも束縛されず、主体性をもって真実の自己として行動し、力の限り生きていくなれば、何ごとにおいても、いつ如何なるところにおいても、真実を把握出来、いかなる外界の渦に巻き込まれたり、翻弄^{ほんろう}されるようなことは無い。そのとき、その場になりきって余念なければ、そのまま真実の妙境^{みょうきょうがい}涯であり自在の働きが出来るというものである。

法句経の「おのれこそおのれ自身の主(あるじ)である。おのれこそ自身の抛りどころである。おのれがよく制御されたならば、人は得がたき主を得る」と云う言葉にも通じることであるが、その主となつての自在の働きが万縁^{まんえん}万境の中で生き生きとして輝いてこそ立処^{たつどころ}真なりといえることなのだ。

釈尊^{しゃくそん}最後の説法の「自灯明 法灯明」として知られるが、汝らは自らを灯明とし、法を灯明とし他を抛りどころとすること無く修行するものこそ最高処にあり」とあるように他により所を求めず、己れ自身の中に真実の自己を見いだすことが肝要である。即ち「随处に主」たれば如何なるマインドコントロールにも影響されることは無いはずである。

趙州和尚^{ちやうしゅう}は修行僧の「一日二十四時間、どのように心を用いたらよいのか」と云う問いに「汝(なんじ)は二十四時間に使われているようだが、この老僧は二十四時間を使いこなしておるぞ」と答えている。人は皆同じ二十四時間を与えられているが、時間に追われ時間に使われている人の方多いのではなからうか。

現代においては、昼夜の隔てが薄く社会は二十四時間稼動して休みがなくなってきた。そこにわれわれも、つついその社会の流れに巻き込まれ、主体性も無く、動かされ忙しい忙しいとあくせくさせられていることを反省させられる。すっかりゆとりをなくし、時間を失ってきたようにも思える。なんだか知らぬ間に二十四時間に使われていることにあらためて気づき、「随处に主となる」この語が厳しい叱声^{しっせい}となって迫る。

随处に主となるとは、いつ如何なるところにあっても「ここが仏さまから私に与えられた処」として受け止め精一杯、力の限り生き抜くことであろう。

一行三昧（いちぎょうざんまい）

三昧とは梵語のサマディ（三摩地）を音訳したもので、「定」「等持」の意があり、心を一境に專注することです。

この三昧と、「常に一直心を行ず」という言葉が合体して、何時とはなしに一行三昧の言葉が生まれました。「常に一直心を行ず」の語意が理解できれば、自ずから一行三昧の意も領くことができると思います。

直心とは、「直心是道場」の直心で、まっすぐな心、混じりけのない純一無雑な心、分別執着のない心です。ゆえに、何時でも何処でも何事をなすにしても、そのことに純一であれというわけです。

仕事をする時には仕事三昧、遊ぶ時には遊び三昧、食事の時には食事三昧、勉強の時には勉強三昧、その間に一点の雑念妄想をはさむことなく、全身全霊をもって事にあたる、これがまた、一行三昧でもあるわけです。いってみれば「禅」の生命もその一行三昧から始まり、一行三昧に終わると言っても過言ではありません。

一行三昧に徹した面白い話があります。

漢の李將軍は音に聞こえた勇猛な武人で、殊にその弓術は天下無敵で並ぶ者なきと称された人です。ある時、獵に出かけて山また山を踏み越えて進みます。と、突然一匹の大きな虎に出会います。遙か彼方にうずくまっていたのです。將軍は急ぎ矢を番えて、力一杯、満月の如く引き絞りサッと切って放ちます。狙いは違わず、矢は虎の体に立ちます。しめたと思い馳せよってよく見ると、虎ではなく、虎の形をした岩でした。岩に矢が立ったのです。將軍は得意になって、岩に矢が立った例は古今東西聞いたことがない、もう一度やってみようと思つたばかりに、再び射てみます。四たび、五たび、幾たび打っても矢はついに立ちませんでした。

最初虎と思った時には、一行三昧になることができたのです。射ようとする一念の他に何もなかったのです。然るに岩と知ってからは、「俺の弓術は岩をも通すぞ、見ておれ」という雑念妄想が入ったのです。一行三昧になり切れなかったのです。

「一行三昧」、実に簡単な言葉です。しかし、行じ難く、到り難い言葉です。

明珠在掌（みょうじゅたなごころにあり）

この言葉は臨済宗りんざいしゅうでよく使われる公案書である「碧巖録」へきがんろくに収録されています。読みは「みょうじゅたなごころにあり」です。明珠とは計りきれないほどの価値のある「宝」のこと、それをあなたはすでに持っています、という意味です。

その宝は、遠くに探しに行かなくても、すぐそばにあるのと言います。それはあなたの手の中に宝物がすでにあるからです。しかし、宝は目に見える金やダイヤモンド、地位や名誉などと思いがちになってしまいます。

禅の考えで意識すると、「あなたはすでに十分に幸せですよ」となります。「私はすでに十分に幸せ。」なんだか、改めて身の回りとか 自分の内側とかを見直すきっかけになりませんか。

「私はすでに十分に幸せ。」よくよく考えてみれば、自分って、本当に幸せなんだなと思います。妻、かわいい子供たちに囲まれ、素敵な友達がいて、人に恵まれ、健康に恵まれ、仕事に恵まれ、平和でご飯の美味しい日本に生まれ、お笑い番組で笑い転げて、好きなものをたらふく食べることができ、おまけに、無駄な脂肪までたくわえて。そして、どんな宝物にも代えられる可能性を秘めた「未来」まで与えられているから、そう思うと、私は、すでに十分に幸せなんだなと思います。

人は宝物がきっとどこかにあるはずだと、一生懸命外に探しにいきます。けれど、掌（てのひら）を見れば、そこにあるかもしれませぬ。『どこにいかずともみんな幸せをつかんでいる。』もう一度自分を見つめ直して、改めて身の回りとか 自分の内側とかを見直せば、今おかれている環境がどれだけすばらしいものか。

今ある環境に感謝して、感謝の気持ちを忘れずに今、自分ができていることをやるべきことを、一生懸命に全力で、自分らしく取り組んで行くことができれば、本当の幸せ明珠に気づくことができるかも知れませぬ。

因果応報（いんがおうほう）

因果応報とは、ことわざなどに含まれる用語である。「善い行いをすれば、感謝などの善い行いで返り、悪い行いをすれば、懲罰などの報いで返る」と、主に後者の「悪行は必ず裁かれる」という意味で使われることが多い。しかし実際の起源・意味としては間違っており、ただ単に「行動」と「結果」は結び付いているという意味ではない。

仏教的な解釈では、釈迦は、原因だけでは結果は生じないとし、直接的要因（因）と間接的要因（縁）の両方がそろった（因縁和合）ときに結果はもたらされるとする（因縁果）。そこで、縁起と呼ぶ法によってすべての事象が生じており、「結果」も「原因」も、そのまま別の縁となって、現実はすべての事象が相依相関して成立しているとする。

仏教で通俗的に因果と言う場合には、業（ごう）思想と結びつき、自己の存在のあり方にかかわる因果性をいうことが多い。「善因楽果・悪因苦果」と言うように、人間や天人として生まれる善の結果や、地獄・餓鬼・畜生として生まれる悪の結果を得るのは、前世の自己の善業あるいは悪業を原因とするという、方便（本来の教説に導くための一種の方法）としてしばしば使われる。この因果は自然科学的法則ではなく、われわれの行為に関するものである。すなわち、自分のやった善は善果を生み、また悪を行えば悪果が返ってくる、と教える。因果応報とも言われ、人間の行為を倫理的に規定する教説として言われたものであろう。

しかし、このような一般的考え方は、縁起説から考えられない俗説であり、仏教本来の考え方にはそぐわない。

仏教における縁起（えんぎ）は、仏教の根幹をなす思想の一つで、世界の一切は直接にも間接にも何らかのかたちでそれぞれ関わり合って消滅変化しているという考え方を指す。縁起の語は「因縁生起」（いんねんしょうき）の略で、「因」は原因、「縁」は条件のことである。

経典によれば、釈迦は縁起について、

縁起は、「此があれば彼があり」、「此がなければ彼がない。」という二つの定理によって、簡潔に述べられうる。このような有と無と二つの文句が並べられるのは、修辭学的な装飾や、文学的な表現ではなく、この二つは論理的に結び付けられており、「此があれば彼がある」ということの証明が、「此がなければ彼がない。」ということなのである。具体的な例としては、「生がある時、老いと死がある」「生がない時、老いと死がない」の二つがあげられる。なぜなら、生まれることがなければ、老いることも死ぬこともないからである。このように後者の「此がなければ彼がない。」は、前者の「此があれば彼がある」ことを証明し、補完する、必要不可欠なものである。

燈燈無尽（とうとうむじん）

この言葉は、「維魔経」（ゆいまきょう）という古い仏教の経典にある「無尽燈（むじんとう）」という言葉から生まれています。

その昔……。釈尊（ぶつた）（釈迦牟尼世尊（しゃかむにそん）の略）は亡くなられる前に、お弟子さんを伴って北へ北へと旅をしていました。その旅の途中に「ヴェーサーリ」という美しい街に立ち寄られます。その街に維魔（ゆいま）という人が住んでいました。維魔は「資財無量」（裕福で人望がある）な人で、悟りをひらき不思議な力をもって、いつも苦しんでいる人や貧しい人たちを助けていました。その維魔が病気になるって床に伏せた時、釈尊はお弟子さんたちを集めてこう言いました。

「誰か私の代わりに維魔を見舞ってはくれないか」

しかし、お弟子さんたちは、何でも良く分かる維魔に尻込みをして、誰も行こうとはしてくれません。釈尊が、お弟子さんの一人である持世菩薩（じせぼさつ）に見舞いに行くよう言いましたが、やはり見舞いには行けないと言います。どうして行けないのかと釈尊が尋ねると、持世菩薩は、昔維魔と出会った時の話をします。

ある日……。持世菩薩が静かな部屋に座っていると、魔波旬（まはじゅん）（正しい教えを破壊する魔王。仏やその弟子たちに付きまとして仏道修行・解脱の妨げをする）が、たくさんの天女を従えて、音楽を奏しながら帝釈天（たいしゃくてん）の格好をしてやってきました。帝釈天が魔波旬とは知らない持世菩薩は、帝釈天に説法をし始めたのです。

「いい話をしてくれた」

魔波旬はそう言って、私の天女を侍女としてさしあげようと言います。

「とんでもない」と押し問答が始まってしまいます。

そこへ維魔がやってきて「わたしがもらってあげよう」と言います。

神通力のある維魔の前には、さすがの魔波旬も慌てふためいて、逃げようとしませんが逃げることはできません。

すると天上から「悪魔よ天女を維魔に与えるなら逃げることはできるぞ」という声が聞こえてきました。魔波旬は慌てて天女を維魔に与えて去ってしまいます。その時維魔は残された天女たちに説法し、さとりに向かいたいという気持ちを起こさせました。天女たちは、皆魔波旬のところには帰りたくないと言い出してしまいました。困ったのは魔波旬です。

「なんとかしてくれ」と維魔に助けを乞います。

そこで、維魔が天女たちに教えたのが「無尽燈（むじんとう）」という言葉なのです。「たった一つの燈が、百千もの無数の燈に火を付けていく。そして、皆が明るくなり、その燈が絶えることがない。それが無尽燈という考え方だ。あなたたちも自分自身の心の中にあるさとりの燈を、魔波旬のところにいる大勢の天子や天女たちの心の燈に火をつけて歩くのだ。一人の人が百千の人々をさとりに向かわせたとなると、それが無尽燈である。」こうして、天女たちは新しい気持ちになって帰って行くのでした。

ともしび運動

つきることのないともしびを人の心に点していこう。

この思いを形にする運動を起こそうと、昭和51年に当時の神奈川県知事 長洲一二が提唱した運動が「ともしび運動」です。

一燈をもちよろう

—ともしび運動県民のみなさまへ—

肩が触れあうような都会の中で、ひとり暮らしのお年寄りがひっそりと果てて、何日も発見されなかった—こんなニュースが繰り返されています。悲しいことです。

今“物”の面だけでいえば、豊かで、便利で、日常生活のすみずみまで、きめ細かい工夫が凝らされています。それに引きかえ、何か寒々と冷えきってしまったかに見える“心”の世界。

一見、自由に、合理的に生きているようで実は、ひとりひとりがバラバラで、寂しく味気なく感じられる世の中。

いや、私は固く信じます。私たちがもともと持っていた隣人へのあの何げなく温かい思いやりの心は、けっしてなくなったわけではない。人が人を求め、心が心を呼びあう人間本来の願いは、いまも私たちの胸の底深く、静かに燃えているはずだ。

その火を思いきって外に出しましょう。みんなで高々とかがげましょう。

人生という長い旅路には、山もあり、川もあり、天気の日もあらしの日もあります。運悪く足を傷めることもあります。

人間はすべて、多かれ少なかれ重荷を背負って歩む、共に旅する仲間です。特別重い荷を負う疲れた仲間が身近かにいれば、声をかけ、励ましあい、肩をかして、いっしょに歩いていく—これが人生の生き方でありましょう。

私たちはだれでも例外なく老人になります。このひしめき合う現代、思いもよらぬ事故に出合って、あすにも不自由な身になることもありえます。

お年寄りも若者も、健常者も障害者も、みんなが手を握り、肩を組みあって、生きがいを見いだす世の中をつくりたい—そんな願いをこめて、“ともしび運動”を始めました。

“ともしび”—これは古い仏典の一句“燈々無尽”からお借りしたことばです。ひとりの胸にともった小さなともしびも、それを次から次へと点じてゆけば、尽きることなく広がって、太陽のように明るく暖かく、この神奈川を照らすことを、私は確信いたします。

県は、行政の立場で、全力を傾けて努力いたします。どうぞ、ごべんたつください。同時に、県民のみなさまにもお願いします。

みなさんそれぞれ、ご自分のお考えで、おできになる場所、おできになるときに、おできになることで、“ともしび運動”にご参加くださいませんか。たとえどんなに小さな火でも、ひとりひとり、みんなが持ち寄る“一燈運動”を、お考えくださいませんか。

行雲流水（こううん-りゅうすい）

意味

空行く雲や流れる水のように、深く物事に執着しないで自然の成り行きに任せて行動するたとえ。また、一定の形をもたず、自然に移り変わってよどみがないことのとえ。▽「行雲」は空行く雲。「流水」は流れる水。諸国を修行してまわる禅僧のたとえにも用いられることがある。「流水行雲りゅうすいこううん」ともいう。

出典（蘇軾（そしやく）が友人の謝民師推官（しゃみんしすいかん）に宛てた書）

蘇軾は号を東坡（とうば）といい、博学宏才（おうえい）、儒佛道（じゅぶつどう）（儒教、佛教、道教）の三教に通じており、詩文の他に書画にも優れ、北宋第一の文化人といわれています。「行雲流水」は、その蘇軾が友人の謝民師推官（しゃみんしすいかん）に宛てた書の中で、謝民師の文章に対して、次のように評したことに由来しています。「あなたの詩賦や文章は、行雲流水のごとく、形式にとらわれず、流れるままに流れ、しかも止まるべきところにはきちんと止まっています。思想や言葉はまことに自然に表出され、その描写はとても自由で生き生きとしています。」行雲・流水は文字どおり空行く雲と流れる水、どちらも作為のない自然のままの流れを象徴しています。自然で伸びやかな文章のたとえ、あるがままの自然な生き方のたとえ。また何事にも執着せずに自然の成り行きに任せて行動することのたとえとして用いられます。さらに雲水と略して、諸国を行脚して修行を積み重ねる禅僧のたとえとしても用いられています。

禅僧の雲水

雲は悠然として浮かび、しかもとどまることなく、水はまた絶えることなくさらさらとして流れて、また一処にとどまることのない。この無心にして無碍自在のありようが禅の修行にもあい通じることから、この語を禅者は好んで用いた。今も禅の修行僧を「雲水（うんすい）」と云うのも雲が悠々と大空を行く如く、また流れる水の如く一処にとどまらず師をたずね修行の行脚したことから名づけられたことばです。

「行雲流水」は自然現象である。空を行く雲、川を流れる水は一時も同じ状態ではない。雲の表情は一瞬一瞬ごとに変わり、湧きては消え、消えてはまた生ず、でありまた流れる水も常に変化して様々な表情があるように、この行雲流水の語は世の無常を表わした語でもあります。

それはそのままわれわれの人生にも通じることです。雲にはやさしい風ばかりではありません。吹きちぎり吹き飛ばす風もあります。水の流れにも瀬があり曲がりくねる淵があり一様な流ればかりではなく、長い人生もまた然りです。人生、順風満帆ばかりなんてありえません。どんなに障害があり、喜怒哀楽様々な出来事の連続の中にあっても、常に心はその一処にとどまらず、執着せず、雲の如く無心にして淡々と、さわやかに生きるところにこの「行雲流水」の語が生きます。余談ですが、墨染めの衣にわらじ履き、網代笠を被った雲水の姿が自然の風光の中にあれば、ひとつの風景画に見えるかもしれません。ですが、雲水である当人は如何がな心境でしょうか。

破草鞋（はそうあい）

「草鞋」とはわらであんだ履物、わらじの事です。「草鞋を破る」と読めば草鞋をすり切らして長旅をする意、所謂「行脚」の事で、名師を求めて諸方の禅寺を遍参して修行する事です。「破れ草鞋」と読めば履き古されてすり切れ、今は路傍の片すみに打ち捨てられて誰一人として見向きもしない破れわらじの意となります。

禅の修行は一切の妄想執着を断ち切って、真の「無一物」の境涯になりますが、その妙境涯にもとどまる事なくそれを捨て去って、学んだ法や修した道を少しもちらつかせることなく、悟りだの、仏だの、禅だの、その影さえ窺い見る事が出来ない、馬鹿なのか利巧なのか、偉いのか凡夫なのかさっぱりわからない、長屋に住む八つあん、熊さんの手合と同じく、人知れず平々凡々、一個の破れわらじのように、その存在すら知られずに生きていく消息こそが、本当の禅僧の境涯だというのです。他人から有り難がられるようでは未だというわけです。

「破草鞋」が、「関古錘——古びた錘」「破沙盆——こわれたスリバチ」等々と共に禅門で重用されるのはその辺の理由からです。

破草鞋のように生きた人を紹介します。

近世の名僧、渡辺南隠禅師（一八三四～一九〇四）は、はじめ広瀬淡窓に就いて儒学を学び、後に出家して修行し、東京・白山道場を築いて多くの僧俗を教化された人です。

この南隠和尚が遷化（死亡）された後、近所のお婆さんがいうには、「老師ご存命中は私達のいいお茶飲み友達だと思って、しょっちゅう参りましたが、おかくれになってから聞けば、たいそう偉いお方であったそうですね……」。

妙心寺の関山国師は大灯国師の法を嗣ぐと、独り美濃の国伊深の里に隠れ、村人達に頼まれるにまかせて、田畑の耕作、牧牛、伐木に炭焼等々、手伝いの日々でした。村人達にとっては誠に便利で重宝な老爺としかうつりませんでした。

優雅な勅使が山間の僻村、伊深の里に入ってくるのを見て、村人達はまさに青天の霹靂でした。これまでは単なる老爺だと思っていた関山国師を花園法皇の命で迎えに来たのですから、村人の驚きはひとしおでした。

東福寺の画聖兆殿司は、破草鞋の如く生きんと、自ら「破草鞋」をもって号としたといわれています。「破草鞋のように生きる！」、口で云うは易し、実行する事はなかなか難しいようです。

一口吸盡西江水（いっくに きゅうじんす せいこうの みず）

禪語「法演禪師語録」より。『碧巖録』「第四十二則」

居士問馬大師。不與萬法為侶是什麼人。

大師云。待汝一口吸盡西江水。即向汝道。

師云。一口吸盡西江水。洛陽牡丹新吐蕊。

[読下例]

居士馬大師に問う。「万法と侶[とも]たらざるものはれなんびとぞ。」

大師云く。「汝が一口に西江の水を吸盡せんを待って、即ち汝に向かつていわん。」

師云く。「西江の水を一口に吸盡すれば、洛陽の牡丹 新に蕊を吐く。」

『龐居士語録』に「居士後之江西參馬祖大師。問曰。不與萬法為侶者是什麼人。祖曰。待汝一口吸盡西江水即向汝道。士於言下頓領玄旨。遂呈偈。有心空及第句。」（居士、後の江西、馬祖大師に参じ、問うて曰く、万法と侶（とも）と為らざるはれなんびとぞ。祖曰く、汝の一口に西江の水を吸尽するを待ちて、即ち汝に向かつていわん。士、言下に於いて頓し領玄旨を領す。遂に偈して、有心空及第の句を呈す。）とあり、『法演禪師語録』に「龐居士問馬大師。不與萬法為侶是什麼人。大師云。待汝一口吸盡西江水。即向汝道。師云。一口吸盡西江水。洛陽牡丹新吐蕊。」（龐居士、馬大師に問う。万法と侶（とも）と為らざるはれなんびとぞ。大師云く、汝の一口に西江の水を吸尽するを待ちて、即ち汝に向かつていわん。師云う。西江の水を一口に吸尽すれば、洛陽の牡丹、新たに蕊を吐く。）とあり、『碧巖録』に「不與萬法為侶。是什麼人。祖云。待爾一口吸盡西江水。即向汝道。士豁然大悟。作頌云。十方同聚會。箇箇學無為。此是選佛場。心空及第歸。」（万法とともと為らざるはれなんびとぞ。祖云く。なんじが一口に西江の水を吸尽せんを待って、即ち汝に向かつていわん。士豁然として大悟し、頌を作つて云く。十方同聚會。箇箇學無為。これは是れ選佛場。心空及第して歸ると。）とある。利休は古溪和尚に参じて、この「一口吸盡西江水」の語によって悟りを開いたという。「松風供一啜」と同じ境地という。

私の解釈はこうです。人という“部分”が、江(自然の代表)という“全体”と 一体になった時、初めて真理が見える。また、利休は古溪和尚に参じて、この「一口吸盡西江水」の語によって悟りを開いたといわれているそうです。

下種 げしゅ（仏語。信仰の種を人々にうえつけること。仏法にはじめて結縁(けちえん)する段階をいう。)

聞法下種と発心下種

種熟脱の三益のうち、最も大切なのは下種益です。この下種益には、聞法下種と発心下種の二義があります。

妙楽大師の『法華玄義 釈籤』に、「聞法を種と為し、発心を芽と為す」とあるように、聞法下種とは、仏が初めて衆生の心田に仏種を植えつけることで、根本の下種をいいます。また、発心下種とは、植えられた仏種が、時至り縁に応じて発芽させることで、修行の始めに当たります。したがって、同じ下種とはいえ、聞法と発心とでは、「その衆生の機根に、仏種を有するか否か」、「本未有善と本已有善」という根本的な相違があるのです。端的にいうと、本未有善の衆生に対する聞法下種を真の下種とするのに対し、本已有善の衆生に対する発心下種は、その性質上、熟脱に撰せられるのです。

日寛上人は『観心本尊抄文段』に、聞法と発心の下種に三重の秘伝があることを説かれています。

第一には権実相對で、同文段に、「最初聞法は必ず是れ円教、若し発心を論ぜば大小定まらず」（日寛上人文段集 五二六頁）とあるように、釈尊の説いた権経と実経を聞法・発心に立て分けて判釈します。最初の聞法は必ず法華円教であり、他の教法は種となりません。この法華円教が種となり、後に縁に従って発心せしめる教法は大乗の場合も小乗の場合もあって定まらないということです。

第二には本迹相對で、同文段に、「最初聞法、必ずこれ本門なり。若し発心を論ぜば権迹不定なり」（同）とあるように、本迹の筋目の上から立て分けた判釈です。最初の聞法は必ず本門の教法であり、爾前迹門は種となりません。本門に説かれている久遠五百塵点劫の本果釈尊の教法が種となり、この種を成熟せしめる発心の教法は、機縁に従って爾前経の場合も法華迹門の場合もあり、一概でないということです。

第三には種脱相對で、同文段に、「最初聞法は必ずこれ文底なり。若し発心を論ぜば迹本不定なり」（同）とあるように、種脱の筋目の上から立て分けた判釈で、大聖人の究極の決判です。文底とは久遠元初自受用身の証得された本因下種の妙法をいい、迹本とは久遠元初本仏の垂迹である熟脱の釈尊が説いた法華経の本迹二門です。在世の衆生は、久遠元初に下種を受けながら退転して九界に流転しましたが、迹門や本門の教法を縁として久遠名字の妙法の下種を覚知し、真の即身成仏を遂げたのです。つまり、第一の聞法下種の法華円教は、第二の本果の本門の教法に撰せられ、第二の本果の本門の教法は、第三の久遠元初の本因の妙法に撰せられて、最終的には寿量文底本因下種の大法以外は根本の最初下種の教法とならないのです。

ゆえに、三種の相對によって仏法の根本である久遠元初の本因下種の妙法が顕われれば、釈尊の仏法に属する第一第二のすべての経々は、悉く発心下種であり即身成

仏の種とはなりません。ただ、久遠元初の本因下種の妙法だけが一切衆生の成仏の仏種となるのです。

^{ひるがえ}翻って、末法の衆生は一切が未だ根本の仏乗種を植えられていない本未有善の衆生です。ゆえに、末法は、熟脱の教法である釈尊の仏法ではなく、まさに大聖人の弘通された文底本因下種の教法をもって、一切衆生に聞法下種の折伏を進めていくことが肝要なのです。

陽明門（ようめいもん）

陽明門の名称は、宮中(現・京都御所)十二門のうちの東の正門が陽明門で、その名をいただけたと伝えられる。江戸時代初期の彫刻・^{かざりかなぐ}鏝金具・彩色といった工芸・装飾技術のすべてが陽明門に集約され、その出来栄えは一日中ながめていてもあきないので日暮らし門とも呼ばれる。

とりわけ見事なのが、500を超える彫刻の数々だ。中央が盛り上がり、両端が反り返った曲線の特徴とする唐破風-からはふ-の軒下に掲げられた「東照大権現」^{だいごんげん}の額の下で2段に並んでいるのは、上が竜。下はちょっとミステリアスな「息」。「いき」と読むのか「そく」なのか、その読み方すらいまだに不明という。上段の竜との違いは、牙があってひげがないことと、上くちびるに鼻孔があることだ。

額の両横にある彫刻は麒麟。ビールのラベルに描かれた麒麟には体に鱗^{うろこ}があるが、東照宮の麒麟には鱗がない。中央部、白塗りの横木(頭貫)^{かしらぬき}に彫られた宙を舞う通称「目貫の竜」^{めぬき}の左右に勢ぞろいしているのは竜馬。足に蹄^{ひづめ}のある竜だ。麒麟によく似ているが、麒麟は1角、竜馬は2角、麒麟は牙を持っているが竜馬には牙がない。さらに、麒麟の蹄は先が2つに割れた偶蹄^{ぐうてい}、竜馬の蹄は割れていない奇蹄。そして、竜馬が竜の一族である証拠に体に鱗が生えている。

東照宮の建物に刻まれた彫刻の総数は5173体。最多は本社^{かからもん}の2468体(本殿1439体、拝殿940体、石の間89体)、次いで唐門の611体(7センチ×9センチの小さな花の彫刻が400体もある)、陽明門が3番目で508体。彫刻をテーマで分類すると人物、霊獣・動物、花鳥、地紋(一定の図形が繰り返される文様)の4つになり、それらが使われている建物や場所に、法則があるという。例えば、人物の彫刻があるのは陽明門と唐門に限られている、霊獣の唐獅子は陽明門に、^{ばく}獺は本殿にそれぞれ集中している、といった具合である。

日光東照宮の建物を代表する陽明門は、高さ11.1メートルの2層造り、正面の長さが7メートル、奥行きが4.4メートル。胡粉(貝殻をすりつぶしてつくった白色の顔料)^{ごふん}を塗った12本の柱には、グリ紋^{もん}と呼ばれる渦巻状の地紋が彫られている。

有名な「^{まよ}魔除けの^{さかさばしら}逆柱」は、門をくぐり終わる左側の柱。グリ紋の向きがこの柱だけ異なっている。

これと同じ逆柱が、本社^{かからもん}の拝殿と本殿に1本ずつあることは一般にはあまり知られていないようだ。

グリ紋それ自体に魔除けの意味があるといわれているが、「家を建てるときは瓦3枚残す」という言葉があるように、建物は完成した瞬間から崩壊が始まる。それなら1か所だけ仕様を違え、建物はまだ未完成であると見なし、建物が長持ちするよう願った、という推理もできる。

一隅を照らすもの、これ国宝なり

山家学生式

最澄（伝教大師）が日本天台宗を開かれるに当たり、人々を幸せへと導くために「一隅を照らす国宝的人材」を養成したいと、熱意をこめて著述されたもの。

山家学生式

国宝とは何物ぞ、宝とは道心なり。道心あるの人を名づけて国宝となす。故に古人いわ言く、径寸十枚これ国宝にあらず、一隅を照らす、是れすなわち国宝なりと。古哲こてつまたいわく、能く言いて行いうこと能いわざるは国の師なり。能く行いいて言いうこと能いわざるは国の用なり。能く行いい能く言いうは国の宝なり。三品の内、ただ言いうこと能いわず、行いうこと能いわざるを国の賊となす。乃ち道心あるのぶし仏子すなわを、西には菩薩ぼさつと称し、東には君子ごんしと号ごうす。悪事おのれを己むかに向こえ、好事こうじを他たに与よす、己を忘われて他を利りするは、慈悲の極みなり。

意識

国宝とは何でしょうか？宝とは仏道を求める心で御仏みほとけにおすがりし、御仏の教えを実行する心のことです。その心のある人を国宝と名付けます。ですから、齊せいの威王いおうが言うように「径寸十枚（直径が一寸もある宝石が十個）は国宝とはいえません。一隅を照らす人こそ国宝と言えるのです」と。後漢ごわんの牟融むゆうがまたこう言っています。「よく説くが、行動しない人は国の教師である。よく行動して説くことの出来ない人は国の働き手である。よく行動し、よく説く人は国の宝である。上中下、三品の中で説くこともできず、行いうこともできないのを国の賊という」と。そこで、道心のあるぶつでし仏弟子ぶつでしを西（インド・西域）では菩薩ぼさつといい、東（中国・日本）では君子ごんしといます。人のいやがる事は自分が引き受け、人の好むことは他人にゆずり、自己の利害（損得）を忘れて、他人のために尽くすことは、この上ない慈悲（＝見返りを求めない愛）なのです。

一隅を照らす

「一隅」とは、今あなたのいるその場所のことです。お金や財宝は国の宝ではなく、家庭や地域、職場など、自分自身が置かれたその場所で、精一杯努力し、明るく光り輝くことのできる人こそが、何物にも変えがたい貴い国の宝である。一人ひとりがそれぞれの持ち場で全力を尽くすことによって、社会全体が明るく照らされていく。

自分のためばかりではなく、人の幸せ、人類みんなの幸せ求めていこう。「人の心の痛みがわかる人」「人の喜びが素直に喜べる人」「人に対して優しさや思いやりがもてる心豊かな人」こそ国の宝であると。そうおっしゃっています

あなたが、あなたの置かれている場所や立場で、ベストを尽くして照らして下さい。あなたが光れば、あなたのお隣も光ります。町や社会が光ります。小さな光が集まって、日本を、世界を、やがて地球全体を照らすのです。

弘法大師

弘法大師は、宝亀五年（七七四）年六月十五日、讃岐の国の屏風ヶ浦に生まれ、幼名を真魚と言われました。父の名を佐伯直田公と言い、佐伯氏はこの地を治めた豪族でした。母親の玉依は阿刀氏の出であり、叔父の阿刀大足は桓武天皇の皇子伊予親王の儒学の侍講（師）でした。大師は佐伯一族の期待を一身に受け、非常に高い教育を受けていました。

大師は十八歳のときに、大学の明経科の試験に合格して大学博士岡田牛養に春秋左氏伝等を、直講味酒浄成に五経等を学んだのです。明経科は正統儒教を教える学科でした。しかし、大学は若い大師を満足させませんでした。高級官吏として大師が立身出世することを望んだ一門の人々の期待にそむくけれども、儒教や漢文学は大師の高遠な理想から離れていたのです。大師の心は仏教に傾きます。しかし、官寺の僧としての学問を望まず、人里を離れた山林に修行する道にひかれたのです。その時の大師の苦悩と決意が『三教指帰』に書かれています。「夫れ父母覆育提挈すること慇懃なり。その功を顧みれば、高きこと五岳に並び、其の恩を思へば、深きこと四流に過ぎたり。」（大切に私を養育してくれた父母の苦勞は五山のように高く、そのご恩は江・河・淮・済の四河よりも深いのです。骨身に刻みつけております。どうして忘れることができますしょう。）しかし、両親への恩、国王への恩よりも、ひろく人びとに慈愛を及ぼす大きな孝行があると大師は考え、ついに仏道修行の道を選びました。「世間の父母は但一期の肉親を育ふ。国王の恩徳は凡身を助く。若し能く生死の苦を断じ、涅槃の樂を興ふるは三宝の徳。」「僕聞く、『小孝は力を用い、大孝は置しからず』と。」（『小さい孝行は体を使ってするが、大きな孝行はひろく人びとに慈愛を及ぼし、不足のないようにすることである』と聞いている。）

大師は大学を中途退学し、大自然の懐で修行をはじめました。そのきっかけは、一人の沙門から虚空蔵聞持法を伝授されたことでした。「時に一沙門有り。虚空蔵求聞持法を呈示す。其の経に説く。若し人法に依りて此真言一百万遍を読めば、即ち一切経法の文義の暗記を得ん。是に於て大聖の誠言を信じ、飛焰を鑽燧に望み、阿波國大瀧之獄にはんせいし、土佐國室戸之崎に勤念す。幽谷は聲に応じ、明星は影を来す。」

山中に籠もり、虚空像菩薩の真言（ノウボウアキャシャキャラバヤ・オンアリキャマリボリソワカ）を百万遍唱えれば一切の經典の意味が心の中にはいり、その智慧を得ることができる。という教えを聞き、大師は太龍の岳や室戸岬に籠もりました。太龍の岳は四国の深い山の中にあります。捨心岳からは淡路島本州を望める高台であり、室戸岬は太平洋の怒濤の激しい絶勝の地です。大師は山岳で苦行練行する近士（ウバソク）として虚空蔵求聞持法を行い、自然の中に宇宙の生命と交流し、大日如来と入我我入し、仏教の真髓を極めようとしたのです。その後大師は、奈良の諸寺院で仏教研鑽を積み、唐に渡りました。大師が入唐し帰朝後に朝廷に提出した請来目録に見える経論は新渡来書ばかりでした。それ以前に日本に伝わっていたものを含まないことから、大師が当時日本にあった仏教典籍を知悉していたことがわかります。古来日本からの入唐留学生は多かったが、インドの阿闍梨に教をうけたのは大師だけです。

早離・即離（苦しみを体験してわかる他者の痛み）

早離と即離は、幼い兄弟である。両親に早く死別したので毎日泣いていると、ある心のよくない男が、父母にあわせてやるからこの小舟に乗れと誘った。二人はだまされたとは知らずにその言に従う。小舟は沖あい遥かに浮かぶ名もない小島につけられて、幼児二人をおろすと、その男は舟を漕いでもとへ帰ってしまった。

二人の子は、狭い島の中をかけめぐって親を探すが、いるわけがない。ついに飢えと疲れでその島で果てるのである。臨終にさいして弟の即離は、自分たち兄弟の薄命を嘆く。黙って聞いていた兄の早離は弟をなだめていう。

「わたしもはじめは世を呪い、人を怨んだが、この離れ小島ではどうにもならぬ。ただ身をもって学んだことは、親に早くわかれ、人にだまされることの悲しさと、飢えと疲れの苦しきである。されば、つぎにこの世に生まれてくるときは、この苦悩の体験を縁として、同じ悲運に泣く人たちを救ってゆこう。他をなぐさめることが、自分がなぐさめられる道理であることを、われらは学んだではないか」と。

弟は、はじめて兄のことばを理解すると、はればれとした顔となり、互いに抱きあって、息絶えたが、二人の顔にはしずかな明るい微笑が浮かんでいた。兄が観世音菩薩、弟が勢至菩薩であった。この島が補陀落山（白華山・日光山と名づく）である。

セイロンからビルマ、タイへ伝わったパリー語の仏教聖典、いわゆる、『南伝大蔵経』のシリーズの『華嚴経』に見る悲しくて美しい説話です。古い物語ですが、近代人の思索によびかける真理を持っています。

「早離」、「即離」とは、それぞれ「早くはなれる」「すぐに別れる」の意味を持っています。生まれると間もなく、あるいは、ただちに親と別れる子どもは現在でも多い。それはまた親子間とは限りません。欺かれて離れ小島につれられ、帰るに舟もないとは、生きている現実の世界そのものです。この兄弟の名前は、やり直しのきかぬ、二度と返ってこない、かけがえのない人生を暗示しています。

この逃避できない人生という名の小島で出会う幾多の人生苦が、親を求めたり、飢えと疲れで一生を終わる二人の兄弟の物語で代弁されています。弟は怨みと苦悩だけが、島の、つまり人生のすべてのように思っていたが、兄は苦悩を体験することによって、他者の苦悩までもよく実感できたのです。他に奉仕することが自分の救いであること、自分の不運を嘆くだけでは自分は、氷久にしあわせになれぬこと、他に奉仕して、はじめて自分が浮きあがれる道理が見えてきたのです。経験できたのです。

人間は、追いつめられると、このように価値を創造しようとする意欲が、無意識のうち自分の奥底に埋みこまれていたことを、意識として実感できることをこの物語の作者は説かれたのです。私たちは、難関に当たったら勇気を持って生きていかねばなりません。しかし、苦しみを体験してはじめて、他の苦しみが理解できるのです。だから、どんなに自分が苦しくても周囲の人によくしてあげ、ともに明るく生きてゆこうと努めることは、より大切なことです。

私たちは、大きな眼をひらいてみると、自分のまわりの誰彼から、何らかの恵みを受けて生きているのです。ときには、自分に辛く、意地悪く当たる、という逆のかた

ちで表れる冷たい恩恵もあります。それを、温かにして人々に返すところに、怨みが昇華（ある状態から、さらに高度の状態へ飛躍すること）されて、すばらしい慈愛に変わります。かくて、自分も他人もともに救われるのです。それを仏教では「供養」といいます。

にちにちこれこうにち
日々是好日（にちにちこれこうじつともいう）

この語は中国の唐末とうみから五代にかけて活躍された大禅匠しやう、雲門文偃（うんもんぶんえん）禅師の言葉です。

たぐい希まれな、鋭い機峰きほうと、すぐれた禅的力量的持ち主であった禅師は、簡潔かんけつな語句を駆使して、自由闊達かっただつに禅を説きました。

日々是好日は雲門禅師の悟りの境地を表した、最高の言葉であります。毎日いい日が続いてけっこうなことだ、などといった浅い意味ではありません。一般に私達が、今日はよい日だ悪い日だという場合、天気だけでなく、お金が儲かった・損をした、よいことがあった・嫌なことがあったなど、そんなものさしで判断します。

しかし、これは優劣ゆうれつ・損得そんとく・是非ぜいひにとらわれた考え方です。それではたとえ、ある日幸運が訪ずれても、その後に来る不運ふうんに脅おびえなければなりません。

日々是好日とは、そんなこだわり、とらわれをさっぱり捨て切って、その日一日をただありのままに生きる、清々すがすがしい境地です。たとえば、嵐の日であろうと、何か大切なものを失った日であろうと、ただひたすら、ありのままに生きれば、全てが好日（こうにち）なのです。

好日の好は好悪（こうお）の好ではありません。「嵐か、よし、嵐なにするものぞ！」、「失ってしまったか、よし、どうにかこれを改善しよう！」と、積極的に生きる決意“よし”がこの“好”なのです。

良寛りやうかんさんが、「災難あに逢う時節には災難に逢うがよくそうろう候、死ぬ時節には死ぬがよく候」と言った境地こそ、この心境です。どんな災難が湧き起こっても素直に受け入れられる心、たとえ、大病になっても、うろうろせずに静かに病人になっている心、殺すと言われても笑って手が合わせられる心、そんな心が自覚できないと、軽々しく「日々是好日」などとは言えないと思います。

禅では、過ぎてしまったことにいつまでもこだわったり、まだ来ぬ明日に期待したりしません。目前の現実が喜びであろうと、悲しみであろうと、ただ今、この一瞬を精一杯に生きる。その一瞬一瞬の積み重ねが一日となれば、それは今までにない、素晴らしい一日となるはずです。

一切唯心造 (甘露門)

「一切は唯だ心の造るものなり」と読まずに、「一切唯心造」と読みます。

盆の季節になると各寺院では、施餓鬼会——釈尊在世当時、弟子の阿難尊者が、「定命尽き餓鬼道に墮ちるのを免れたくば、餓鬼に十分な食事の施しをせよ」と陀羅尼經を唱え供養する修法を釈尊より伝授されたことより始まったといわれる、餓鬼、すなわちむさぼりの心を持つ者への食の施しをする行事——が修行されます。その折り、大勢の僧が独特の節回しで唱和する經文に、『施餓鬼——甘露門』というのがあります。その初めに、

若人欲了知 三世一切仏 応觀法界性 一切唯心造...

若し人、三世一切の仏を了知せんと欲しなば、応に法界の性を觀ずべし、一切唯心造なり、と。

—もし仏のこころを知ろうとするならば、宇宙一切の諸法の本性を唯だ心造なりと觀ずべし。

.....

「一切」とは、すべての現象、存在を意味します。「唯」とは、ただそれだけのこと、私たちの周囲のすべての存在現象は「心」の働きであり、「心」が造り出したものにすぎないというわけです。すなわち、あらゆる存在は心より現出したものにほかならず、心のほかに何物も存在しないのです。

白隠禪師はあるとき、一人の若侍から地獄の有無を問われます。白隠は若侍を一瞥して言います。「貴公は見たところ立派な武士だが、いい年をして、まだ、地獄が有るのか無いのかとはあきれたことだ！」とくそみそに罵倒し、あげくの果てには、不忠の臣、不孝の子よ！腰抜け侍！と口を極めて面罵します。初めは有名な高僧の言うことだと齒をくいしばって耐えていた若侍も、ついに我慢しきれなくなって、やにわに刀を抜いて白隠に斬り掛かります。白隠和尚は巧みに逃げまわりますが、ついに追い詰められて一刀のもとに斬り伏せられようとする刹那、白隠は「そこが地獄だ！」と鋭い叱声を飛ばします。」

その一語を聞いた若侍は正気を取り戻し、なるほどと合点します。さきほどの鬼面もどこへやら、思わずそこに平伏して、笑みさえ浮かべて言います。「わかりました。地獄の所在がしかとわかりました」と。すると白隠もにっこり笑って、「そこがまた極楽よ！」と事もなげに言い切ります。

地獄も極楽も所詮、心の中にあったわけです。心が造り出したものにほかならないのです。

有無・得失・善悪・美醜・愛憎など、一切の相対的差別の見方も、これすべて心の造り出したものです。相対的世界があるからそこに争いがあり、悩みがあり、迷いが

あるわけです。

法界すべて一切唯心造と達観^{たつかん}すれば、自然にそれらの対立が泯然^{みんぜん}と消えて、真如^{しんにょ}そのままの心になることができます。まさに仏の心を知ったというべきです。

至道^{しどう}は無難なり、唯だ揀択^{けんじやく}を嫌う。但だ憎愛莫^{たぞうあいな}くんば、洞然^{どうねん}として明白なり

と『信心銘』にある通りです。一切唯心造、この語を知的に理解することはやさしい、しかし、一切唯心造を達観^{たつかん}して、洞然^{どうぜん}として明白になることは難しいものです。

照顧脚下

禪寺の玄関にはよく「照顧脚下」と書かれた札が下がっています。「履物を揃えて脱いで下さい。足元に注意して、進退往来に十分気を付けて下さい。」と言う意味です。しかし、そこには「自分自身の足下、置かれた状況、自分自身をしっかりと見つめなさい。」という別の意味があるのです。他人の足下、つまり他人の長所や短所、その方の立場などは見ている、自分の足下、つまり自分自身のこととなると案外見ているようで見えていないものです。

何か事を始めるに当たって、自分自身の事を見つめることがあるでしょう。しかし、それが順調に進み、うまくいくと視線が下から上に移り「もっと成功したい・もっと幸せになりたい」と次から次へと“もっともっと”が増上し、欲望が増えつづけていくのです。自分の置かれた状況を見つめ、足下を見ているときは良いのですが、初心を忘れ、先ばかりを見ていると足下が疎かになり、気が付いたときには砂上の城に住んでいたと言う事がよくあります。

大切なのは、自分自身をしっかりと見つめると言うこと。自分を見失わないと言うことです。そこで、「今自分が為すべき事は一体何なのか。何をしなければならないのか。」と言うことを自分でしっかりと思慮せねばなりません。為すべき事がわかれば、今度は迷わずそれを行動に移すのです。「勇気がないから自分にはできない。失敗すると怖いから次に進めない。自分に自信がない。」と泣き言を連ねても何も始まりません。頭ばかりで考えていてはいけないのです。実際に身体を動かし、目標に向かって一步一步足を進める事が大事なのです。自分で考え、悩み、苦勞しなければ本当の幸せはこないのです。自分で考え、悩み、苦勞すれば、自信もつき勇気も備わるのです。

少しでも困難な事に突き当たればすぐに誰かが助けてくれるとか、親切にしてもらえることが当たり前だと思っておられる方が最近特に多いようですが、それは大変な間違いです。まず自分で為すべき事を為してください。涙を流しながらでも、目の前の困難に立ち向かってください。何かを成し遂げたとき、何かを乗り越えたときに初めて、大きな幸せがあるのです。自分でやった方だけが、本当の他人の有り難みや感謝の念を持つことができるのです。自分で頑張った方は決して足下を見誤ると言うことはありません。

まずは、ご自分の足下をしっかりと見つめてください。「脚下照顧」です。

かんろ 甘露

甘露とは、中華世界古代の伝承で、天地陰陽の気が調和すると天から降る甘い液体。後世、王者が高徳であると、これに応じて天から降るとされた。転じて中華王朝の年号にも用いられる。

甘露、その語源を辿ってみると、「かんろ」は梵語、アマリタの漢語訳。アマリタの意味は「不死」。インド ヒンズー教の神話では、神々がこの世のはじめに大海を攪拌して得た不死の霊液。これを飲むと、苦悩は去り、長寿、死者をよみがえらせる。これが中国にわたり、天子が仁政を行うめでたい前兆として、天から降ってくる霊液、霊酒、という伝説となる。佛教では、(トウ)利天から降る甘味のある霊液、霊酒として、よく苦悩を癒し、不老不死、最高の滋味をもつものとされ、いろいろのお経、説話に引用され、佛の教えを喩えて「甘露の法門」とさえいう。法華経観世音菩薩普門品、いわゆる観音経では、観音さんの加護の力を讃え、「甘露の法雨をそそぎて煩惱の炎を滅す」大無量寿経では、極楽浄土には数多くのすぐれた浴池があり、いずれも「八功德の水（・甘く・冷たく・やわらかく・軽く・澄みきり・臭みがなく・飲む時のどを損なわず・飲み終わって腹を痛めないという八つの特性の水をさす。）、湛然として満ち、清浄香潔にして、味わい甘露の如し」と、まさに華麗、優美、神秘的な甘美の世界である。

鎌倉時代の説話集、宇治拾遺物語の一節。

「昔、唐の国の僧が印度に行き、あちこちを歩きまわっていました。ある山の片側に大きな穴があり、この穴に牛が入っていきました。暗い穴の道をくぐりぬけると、急に明るいところに出ました。見渡すと、この世にはないような別天地で、名も知らぬ美しい花が咲き乱れています。牛がこの花を喰べているので、僧も「この花を一房とって食いたりすれば、うまきこと天の甘露もかくあらんとおぼえ」つついとお腹いっぱい食べましたので、肥満体になってしまいました。あまりの美味さに恐ろしくなって、今きたばかりの穴へ帰ろうとしましたが、入るときは容易に通った穴も、身体が太くなったため通りにくく、やっと穴の入口までたどりつきましたが、どうしても出ることができません。穴の前を通る人に助けを求めても、誰も聞き入れてくれません。僧は数日後、とうとう死んでしまい、その後、石となって穴の口に頭をさし出したようになっていました。

ご想像の通り、眼前の欲望に負けてはいけませんよ、という東洋のイソップ物語です。現在にも通じるような話ではないでしょうか。

真言宗

真言宗しんごんしゅうの教えは、弘法大師こうぼうだいしによって完成されました。その教えは、自分自身が本来持っている「仏心ぶつしん」「限りない人格」「さとりの世界」を、「今このとき」に呼び起こす即身成仏そくしんじょうぶつに求められます。それは、自分自身を深く見つめながら、「仏のような心で」「仏のように語り」「仏のように行う」という生き方です。この教えをもとに、人々がともに高めあっていくことで、世界の平和がもたらされ、理想のところとしての密厳みつごん仏国土ぶつこくどが完成するのです。

真言宗のご本尊ほんぞんは大日如来だいにとちによらいです。大いなる智慧ちゑと慈悲じひをもって、すべてのものを照らす根本の仏さまです。私たちが手を合わせるさまざまな仏さまは、すべて大日如来の身を変えた姿なのです。それぞれにご縁のある身近な仏さまへの信仰しんこうは、すべて大日如来につながっているのです。

曼荼羅まんだらは、真言宗の教えをもとに、宇宙に遍満へんまんする生きとしい生けるものの「いのち」を仏身の姿として、大日如来を中心に描き出したものです。胎蔵法曼荼羅たいざうほうまんだらには広くものをみて互いを認め合う慈悲の心、金剛界曼荼羅こんごうかいまんだらには人生を深める智慧の光があらわされています。

開宗の背景

南都六宗なんとろくしゅう [法相宗ほっそうしゅう、三論宗さんろんしゅう、成実宗じょうじつしゅう、俱舍宗くしゃしゅう、律宗りつしゅう、華嚴宗けごんしゅう] と呼ばれる奈良仏教は、一口に国家仏教、学問仏教というべきものでした。寺院は官寺かんじであり、僧尼は官吏そうにかんり（国家公務員）でした。そして律令体制のもとで主に呪術的な祈願にたずさわり、体制をささえる役割を果たしていました。僧侶たちも人々の苦しみを救うという仏教本来のつとめよりも、むずかしい理論研究におちいりがちでした。しかしやがて本来の使命に目覚め、人々のために生きようとする僧侶たちにより、山林に苦修くしゅう練行れんぎょうして自らを磨き、世のため人のために働こうとする民衆仏教が芽生えてきます。また平安遷都に伴い、新しい国づくりを目指す日本にとっては、その原動力となるような生命力に満ちあふれた、新しい教えの出現が求められていました。このような時代的、社会的な課題を踏まえて、真言宗は開かれたのです。

開宗の意義

こうした背景の中で、人生の苦しみを本当に救う正しい仏教を求めて、その頃世界第一の文明国であった唐の国へ留学した弘法大師は、その都長安（今の陝西省せんせいしゅうの西安）の青竜寺しょうりゅうじで、インド以来の密教の正統を伝える第一人者、惠果阿闍梨けいかあじやりにめぐり合い、その教えを始めとして、儀礼、法具、經典類まで、あますところなく受け継いで、密教の正統な伝承者ふほうでんじ（付法、伝持の第八祖）となると共に、世界最新の知識や見聞を身につけて帰国されました。そして惠果阿闍梨の遺誡ゆいかいに従って、仏教の正しい伝統を踏まえた上で、広い視野と的確な識見にもとづいて密教の教えを組織づけ体系づけて、真に生命力あふれた、時代即応の真言宗として開宗されたのです。

大日如来

大日如来は、遍照如来ともいい、大乘仏教における如来の一。宇宙と一体と考えられる汎神論的な真言宗などの密教の仏陀（法身仏）であり、大毘盧遮那成仏神變加持經（大日經）の教主毘盧遮那如来である。その光明が遍く照らすところから遍照、または大日という。大日經の説く胎藏曼荼羅中台八葉院九尊の主であり、金剛頂經の説く金剛界曼荼羅五智如来の中心。空海の開いた真言宗において、究極的には修行者自身と一体化すべきものとして最も重要な仏陀である。不動明王は、密教の根本尊である大日如来の化身、或いはその内証（内心の決意）を表現したものであると見なされている。

大日如来は、真言密教において一切諸仏諸尊の根本仏として帰依し観想されている本尊です。大日如来の名前は、大日の智慧の光が、昼と夜とで状態が変化する太陽の光とは比較にならないほど大きく、この世の全てのものに智慧の光をおよぼして、あまねく一切を照らし出し、また慈悲の活動が活発で不滅永遠であるところから、特に太陽である「日」に「大」を加えて「大日」と名づけられています。

真言密教の根本経典である『大日經』と『金剛頂經』には、衆生の救済者としてそれぞれ異体的な性格をもち、特定の誓願をもった諸仏諸菩薩をはじめ諸神が説かれています。これらの全ての諸尊は、大日如来より出生し、大日如来の徳をそれぞれが分担し、また衆生救済にあてられている諸尊の働きも大日如来の徳の顕現であると説かれています。

根本経典である両經には、大日如来の徳の現れ方を、多くの諸尊との関係において説かれています。その関係を図示したものが胎藏曼荼羅・金剛界曼荼羅で、この両曼荼羅を総称して両部（両界）曼荼羅と呼ばれています。

この両部曼荼羅に描かれている大日如来の姿は、釈迦如来や阿彌陀如来のような出家の姿ではなく、うず高く髪を結（ゆ）うなど、一般に菩薩形と呼ばれる姿をされて他の如来とは異なっている点が特徴といえます。菩薩形の姿である大日如来は、宇宙の神格化とも考えられる密教観から、宇宙の真理そのものを現す絶対的中心の本尊として王者の姿をされているといわれています。その姿は帝王にふさわしく五仏を現した宝冠をつけ、菩薩よりさらにきらびやかな装身具を身にまとわれています。背に負う光背は円く大きなもので日輪を表し、諸仏諸尊を統一する最高の地位を象徴するにふさわしい威厳のある姿です。

不動明王

この仏はもうすでに十分悟りをひらいているのだけれど、元々もし悟りを開いても、決して高い立場からものを言うのではなく、以前と同じように、大衆の中で親しく過ごしていきたいとの願いがあり、このような姿をとっておられる。そして実際に仏の仕事、相手の立場に応じて続けておられるのです。この尊は他の仏と違い、姿・顔に迫力が有ります。これは特に難化の衆生を救うことを前面に出しているからです。「外には忿怒の姿を示せども、内には深く慈悲に住す。」といわれますように、言うことを聞かない人々を、何とかしてやりたいという、優しさの極致が、この忿怒の形相になっているのです。

禅の修行 雲水（うんすい）

禅の修行僧のことを「雲水」とよびます。『正法眼蔵隋聞記』には「雲の如く定まれる住所もなく、水の如く流れゆきて、よる処もなきをこそ僧といふなり」とあるように、本来、行雲流水のごとく諸国の師をたずね、道を求めて行脚する修行僧を「雲水」といいます。転じて禅寺で修行生活を送る僧をもいうようになっています。

開静かいじょう

《静睡（じょうすい）を開覚する意》 1 禅宗寺院で、早朝、版をたたいて、起床を促すこと。 2 曹洞宗で、座禅をやめて座を離れること。

開板かいばん

禅堂の前門の扉の脇に厚い檣けやきの「木板」が吊り下げられています。時を知らせるために1日に幾度か打ち鳴らされます。開静で堂内大衆が起きた後に、侍者（侍者寮子）はこの時鐘とも言うべき「開板」を鳴らします。数々の「鳴らしもの」の合図によって修行道場の1日は動いていきます。

規矩きく（規則）

修行道場では生活すべてを、百丈禅師という禅堂制度の創始者が定めたきまり「百丈清規」を基盤にしています。難しい法式の類から箸の上げ下ろし、下駄の脱ぎ方まで出処進退規則づくめなのです。

この時代に僧堂ほど上下の関係が厳しいところもないと思います。古い先輩を「高単（こうたん）」「中単（なかたん）」「末単（ばったん）」と分けています。10年、20年と修行している超古参は「評席（ひょうせき）」とよばれて、僧堂の運営を行っています。この序列はすべて年功で、年齢、学歴、出身は一切関係がありません。有能だとかそういうことも関係ありません。1日早ければ1日の長として仕えねばなりません。

出頭しゅつとう

「出頭」はお勤め、提唱（ていしょう 老師の講義）、食事などに参集することです。全て鳴らしものの合図によって動きます。本堂の行事は半鐘・法鼓ほうつづみ、食事は雲板うんぱん、柝木たくき（拍子木）総茶礼や入浴には柝木、参禅には喚鐘かんしょうといった鳴らしものが使われます。開静の後、自分の単たんに戻り袈裟けさを着けて出頭を待ちます。本堂では出頭準備の五声の「支度」が殿司でんしによって必ず打たれます。禅堂では役位入堂の後、開山諷経ふききょうが行なわれ、終わりの三声（お経終了の合図）が鳴って、すぐに本堂から連声れんじょうの「出頭」が点打され始めます。この音と直日の引馨ちよくにち いんけいが呼応して一同は禅堂を出て本堂へと向かいます。前門（禅堂の正面の門）の出入りは出頭・参禅以外は許されず、当然規矩によって雲水の横行はみられません。歩く時は二人以上は必ず雁行がんこうし、叉手当胸さしゆとうきょうして一切無言です。

偉そうに歩いたり、履物を引きずって歩いたりすればたちまち古参の雲水に叱責しつせきされます。「鳴らしもの」によってのみ応じ、無言のうちに行動をするのです。

朝課ちようか

朝のお勤めのことです。まだ暁の闇は深く、本堂内も薄暗いです。本堂に出頭してきた雲水たちは「維那（いのう）」の読む経首にあわせて読経します。読経が終わると維那はその都度「回向文」を朗唱します。僧堂で読まれるお経は「般若心経ほんにやしんぎよう」「消災呪しょうさいじゆ」「観音経かんのんきよう」「大悲呪だいひじゆ」「甘露門かんろもん」「尊勝陀羅尼そんしょうだらに」「楞嚴呪りょうげんじゆ」「金剛経こんごうきよう」「発願文ほつがんもん」などです。

般若心経ほんにやしんぎよう：膨大な般若経の内容を簡潔に表した経典。1巻。漢訳は鳩摩羅什(くまらじゆ)訳など7種あるが、日本では、「色即是空、空即是色」の句のある玄奘(げんじゆ)訳が読経用に広く用いられる。般若波羅蜜多心経。心経。

消災呪しょうさいじゆ：わざわいを消す呪文。災厄を除く真言。

観音経かんのんきよう：法華経第25品、観世音菩薩普門品(ふもんぼん)の通称。→普門品

大悲呪だいひじゆ：千手観音の功德を説く82句の陀羅尼(だらに)。「千手観音大悲陀羅尼経」に記される。

甘露門かんろもん：甘露ということばは、仏典などにもしばしば現れ、ありがたい如来の説法を「甘露の法雨」と称したり、涅槃(ねはん)にいたる門のことを甘露門などといったりする。

尊勝陀羅尼そんしょうだらに：尊勝仏頂の悟りや功德(くどく)を説いた陀羅尼。読誦(どくじゆ)すると罪障消滅や除災・延寿の功德があるとされる。仏頂尊勝陀羅尼。

楞嚴呪りょうげんじゆ：禅宗各派の様々な儀式で唱えられてきたお経(陀羅尼=ダラニ)のこと。

金剛経こんごうきよう：「金剛般若(ほんにや)経」の略。

発願文ほつがんもん：人が亡くなったときに最初に読まれる枕経まくらきようと呼ばれるもの。

枕経まくらきよう：死者の枕元で読経(どきよう)をすること。また、その経。特に、納棺に先立って行われるものをいう。

堂内諷経どうないふきよう

朝課が終わると、本堂から引き揚げてきます。そしてすぐ禅堂の仏さま「聖僧しようそう」さんにお経(心経・消災呪)をとねえます。最後に直日えこうもんが回向文をとねえ終わると、その引馨に従って大衆は一斉に単布団の上に坐具を広げ、今日1日の無事を祈って五体投地の三拝を行ないます。

常住諷経じようじゆうふきよう

堂内の大衆と共に朝課を終えた常住非番員は、「韋駄天」さまの前に移動してお経(心経、消災呪)をとねえます。世間では「韋駄天走り」などで意外と有名な甲冑かっちゆうを身に着けたこの仏さまは、仏法、建物を守護する天神で、どんなお寺にも庫裏には必ず祀まつられています。(禅宗しか知りませんが…) 韋駄天諷経の時は、仏さまも駿足しゆんそくで有名(韋駄天走り)ですが、お経も速く読むことになっています。殿司の振鈴の合図に

よってお経は読まれていきます。

典座

開静と同時に常住では、まず「典座」が真っ先に朝食のお粥の準備にかかります。一般的に「飯炊き」「お勝手係」といえば「おさんどん」というイメージがあり、軽いポストと思われていますが、僧堂では全くの正反対です。僧堂の役寮の中でも「典座」は重要なポストなのです。大勢の大衆の生命をあずかり、縁の下の力持ち的料理番の典座は、僧堂で収穫された野菜や、檀信徒からの供養の素材を心を込めて調理して一切無駄のないように使うことに気を配っています。

《「ぞ（座）」は唐音》禅宗寺院で、大衆の炊飯などの食事をつかさどる役職。もとは床座・衣服などをつかさどった。六知事の一。

六知事：禅宗寺院で、雑事や庶務をつかさどる六つの役職。都寺(つうす)・監寺(かんす)・副寺(ふうす)・維那(いの)・典座(てんぞ)・直歳(しっすい)の総称。

独参

堂内諷経（常住では韋駄天諷経）が終わり、袈裟をはずしてしばらく待ちます。程なく朝の「独参」（参禅）の喚鐘が鳴ります。すると雲水たちは一斉に単から降りて禅堂を飛び出し、長い渡り廊下を走り、老師の部屋がある隠寮へと向かいます。臨済宗には独特の試験問題「公案」があります。老師の部屋に入り、その見解を述べる「入室」を普通は「独参」といいます。その「公案」とは、禅宗史上数多い祖師、和尚たちの語録や行動の記録を「課題」として修行者に示し、悟りに導くために工夫させるものです。その数は1700あまりあるそうです。

飯台看

飯器（はんき）、菜器（さいき）、湯器（とうき）、折水器（せつすいき）、生飯器（さばき）これらの器を使って給仕をする係りを「飯台看」といいます。この食事当番は堂内衆と常住から1人ずつ出て、また交代制で廻ってきます。食堂（じきどう）では、大衆に給仕するのですが食事中は読経以外一切無言なので、相手の合掌や手のサインで加減します。

粥座

「飯台看」の鳴らす雲板を合図に、大衆は直日に先導されて食堂へと向かいます。玄関と本堂との間の畳敷きの廊下（？）が食堂です。着座して食事のためのいくつものお経をとなえ、各自持鉢を開いて飯台看から給仕してもらいます。生飯を箸でつまみだして餓鬼に供えます。「看頭（かんとう）」の柝木一声で、一斉に低頭してはじめて箸をとって食べます。朝は「粥座」と称する薄い粥です。それと梅干と薄く切った沢庵がでます。もちろん一切無言です。粥のすする音も、漬物をかむ音も、器を置く時の音までも出すことは許されません。こうした雰囲気の中で食事が終わり、持鉢の

中に一杯のお茶を注いでもらい、そのお茶にて洗鉢して、布巾で拭いて持鉢をしまします。そしてまたお経をとこなえてから、退堂します。

はつあんぎゃ 初行脚

禅宗の僧となるには、たとえ専門の大学を卒業しても、一度は必ず専門道場に入門して、修行僧として生活しなくてはなりません。僧堂の入門は掛塔（かとう）とといいます。掛塔志願者の多くは大学を卒業したての若者がほとんどです。

かしやく 掛錫

《錫杖（しゃくじょう）を僧堂の壁に掛ける意》行脚の禅僧が、僧堂に滞在し修行すること。転じて、僧堂に籍をおいて修行すること。掛搭（かた）。→飛錫（ひしゃく）

にわづめ 庭詰

山門をくぐって玄関へと入り、式台に低頭して意を決して「ターノーミーマーショーウ」と大声を出しました。すると中から「ドーレー」と応答があり取次ぎの雲水が現れます。入門の許しを請うと「当道場はただいま満衆（満員）につき、庫下も廻りかねますので（お寺の会計も苦しいので）お引取り下さい」と断られるのです。しかしいくら追い払われても重ねて許しを請わねばならないのです。玄関先に斜めに腰をかけ、袈裟行李の上に頭を乗せて低頭懇願するのです。用便に立つ以外はそこを動かずに座り込んで低頭を続けます。受付の雲水に引きずり出されたりもしますが、それでも舞い戻って続けます。ここでは修行に対する決意を試しているのです。

とうしゆく 投宿

3時ころと思われるころ、「日も落ち、足元も暗くなりましたのでご投宿（とうしゆく）をお願いいたします」という声。勝手口から中に入り、草鞋わらじを脱いで運ばれたバケツの水で足をすすぎ、玄関脇の小部屋に上がり込み、袈裟文庫を自分の前に立てかけて対面して落ち着くと少しほっとする思い。ようやく不自由な体勢から解放されたものの、身体のあちこちが痛く、また初めてのことばかりが続き、心も疲れた、そんな1日でした。

たんが 旦過

旦過とは「夕刻来たり、翌朝（旦）過ぎ去る」という意味だそうです。

たんがづめ 旦過詰

3日めの朝になると朝の追いたては無くなります。第一の関門を通過出来たのですが、さらに厳しい試練が待っています。「旦過詰（たんがづめ）」です。5日間、お勤めと食事と用便以外は立つことも許されず、ひたすら壁に向かって坐禅に明け暮れるのです。このつらく厳しい期間を耐え抜いた者だけが晴れて僧堂へ知客（しか）「知客（しか）」は来客や修行僧に応接し、僧堂の綱紀を司り、僧堂全体を取り締まる

役のことです。ちなみに現在では、「副司（ふうす）」が兼務することが多いそうです。副司とは会計を司る役です。5日間の旦過詰が終わり、山門をくぐって8日目の朝に知客さんの前に連れて行かれ、教えられながら恐る恐る低頭すると「今まで随分お断りしてきましたが、あなた達は願心も堅いようですし、それにただ今欠員も出来たので、僧堂入りを許可しましょう。」との話。ようやく入門出来るのです。

参堂

知客さんの話が終わり、禅堂へ向かいます。禅堂は庫裏から渡り廊下で結ばれている別棟で、天井は高く中は一面の敷き瓦、正面の厨子には「迦葉尊者（聖僧）」が祀られ、左右両側が一段高くなって畳敷きになっている大きな建物です。案内の「侍者（聖僧に仕え禅堂、大衆の世話をする役）」さんの指示に従い、袈裟、足袋を着け、居並ぶ大衆（修行僧たち）にひとりずつに低頭します。役位入堂のあと、まず聖僧さまにこれからの僧堂生活の無事を祈る三拝をします。そして「直日（じきじつ）」さんという禅堂取締り役の前に行き、お願い致しますの意味の低頭。それが終わり、自分の席となった場所に着き、座ったと同時に侍者が「新到（しんとう）お～参堂お～」と大声で叫ばれます。すると座っていた先輩達は一斉にその場で低頭をします。これで仲間入りとなります。

安单

これでようやく落ち着きました。直日单とよばれると畳十畳くらいの場所の末席の畳一枚がこれから自分の席となります。「起きて半畳、寝て一畳」といわれるようにめいめいが指定された畳一畳分のスペースで、坐禅したり、単の縁で食事したり、夜は布団に入って寝たりするわけです。自席の後ろには身の回りの物を取める物入れなどがあり、袈裟、お経の本、持鉢（食器）など各自の持ち物はすべて単の所定の場所に置く事になっています。同じ時期に掛塔した仲間は「同夏（どうげ）」とあって、これからずっとお互い励ましあい助け合っていくこととなります。

相見

参堂してから1週間ほど経ったころ「老師相見」と告げられました。袈裟、足袋をつけ同時期に参堂した同夏と共に隠寮（老師の部屋）へ行きます。緊張しながら副司さんに教えられた作法どおりに、まず新到頭の「玄さん」が「相見香」を供え、そして全員で老師に三拝し、低頭します。そして老師から修行についての訓戒を受けます。

ろっこんしょうじょう 六根清浄

仏法では、衆生の苦悩の原因を迷いの生命の根源である煩惱（ぼんのう）から引き起こされるものと解明しています。その衆生の迷いの生命を浄化し、悪い性（さが）を断ち切るといふ果報が、まさに「六根清浄」の功德なのです。六根の「根」とは、草木の根に譬（たと）えられ、私たちの生命が周囲のものを取り入れたり、認識する能力のことで、眼根（げんこん）・耳根（にこん）・鼻根（びこん）・舌根（ぜっこん）・身根（しんこん）・意根（いこん）の六つの器官をいいます。眼根とは、視覚能力・視覚器官。耳根とは、聴覚能力とその器官。鼻根とは、嗅覚（きゅうかく）能力とその器官。舌根とは、味覚能力とその器官。身根とは、触覚（しょっかく）器官としての身体とその能力。意根とは、前の五根によって得られた内容を統合判断する思惟（しゆい）能力、または知覚をいいます。この六根が煩惱に覆（おお）われていると、外界の事象を正しく認識できないばかりか、それにとまなう行動も誤ったものとなり、苦しみの原因を作ることになるのです。こうした業苦を消滅させるためには、六根そのものを清らかな状態にしていくことが必要です。

『法師（ほっし）功德品（くどくほん）第十九』には、「是（こ）の法華經を受持し、若（も）しは読み、若しは誦（じゅ）し、若しは解説（げせつ）し、若しは書写（しょしゃ）せん。是の人は、当（まさ）に八百の眼（まなこ）の功德、千二百の耳の功德、八百の鼻の功德、千二百の舌の功德、八百の身の功德、千二百の意（こころ）の功德を得べし。是の功德を以（もつ）て、六根を莊嚴（しょうごん）して、皆清浄ならしめん」（開結四七四）と説かれ、法華經受持の功德によって、六根それぞれに多くの清浄の果報を得ることが明かされています。これを概説（がいせつ）すると、次のようになります。

眼根の功德—すべての事象が明らかに見え、物事の因果を正確に知ることができる。

耳根の功德—あらゆる音声から、実（じつ）・不実を聞き分けることができる。

鼻根の功德—あらゆる臭（にお）いを嗅（か）ぎ分け、分別（ぶんべつ）を誤ることがなくなる。

舌根の功德—勝（すぐ）れた味覚を持ち、さらにその声は深妙（じんみょう）となり、聞く者を喜ばせることができる。

身根の功德—穩（おだ）やかで健全な身体となり、外界の刺激に適合させ、自身を処（お）することができる。

意根の功德—心は清らかに、頭脳は明晰（めいせき）となり、智慧が深くなる。

すなわち、六根清浄とは六根にそなわる煩惱の汚（けが）れが払い落とされ、物事を正しく判断できる智慧（ちゑ）を得ることをいうのです。たとえば目が不自由であったとしても、妙法受持の功德によって、肉眼（にくげん）以上の慧眼（えげん）・法眼・仏眼を得ることができるのであり、このような功德は他の五根にもつうじていえることなのです。日蓮大聖人は、「功德とは六根清浄の果報なり。所詮今（いま）日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は六根清浄なり」（御義口伝 新編一七七五）と仰せられ、末法の法華經である南無妙法蓮華經を信じ唱える者には、必ず六根清浄の功德がそなわると教示されています。

ぼんのうそくぼだい 煩惱即菩提

真の悟りとは煩惱を知ることによって得られるものだという事。

煩惱にとらわれている姿も、その本体は真実不変の真如しんによすなわち即ち菩提（悟り）であり、煩惱と菩提は別のものではないということ。

煩惱と悟りとは、ともに空（くう）なるもと、本来は不二（ふに）・相即（そうそく）していること。煩惱がそのまま悟りの縁となること。大乘仏教の用語で、積極的にはすべては真実不変の真如（しんによ）の現れであり、悟りの実現をさまたげる煩惱も真如の現れにほかならず、それを離れて別に悟りはないことをいう。

せいしそくねはん 生死即涅槃

大乘仏教の空観（くうがん）に由来するもので、悟った仏智ぶつちから見たならば、迷える衆生しゅじょう（現実）の生死の世界そのものが不生不滅しじょうじじょうの清浄な涅槃ねはんの境地であるという意。煩惱即菩提と対句で用いられる。煩惱のために生死の果（迷界の苦果）があり、菩提によって涅槃の果（悟界の証果）があるというような、両者が互いに隔絶した位置関係にあるのは、凡夫（ぼんぷ）が執着（しゅうじゃく）し迷っているからであり、ひとたび仏智見を得たならば、煩惱には煩惱の相はなく、菩提には菩提の相はなくなっており、いとうべき生死もなく、求むべき涅槃もない。積極的にいえば、煩惱と菩提、生死と涅槃は不二・相即している。こうして、生死即涅槃と煩惱即菩提の2句は連用される。

煩惱：(1)心身を乱し悩ませ、正しい判断をさまたげる心のはたらき。貪（どん）・瞋（じん）・痴（ち）のいわゆる三毒が煩惱の根源的なものであり、とくにその中の＜痴＞、すなわち物事の正しい道理を知らないこと、すなわち十二因縁いんねんの＜無明（むみょう）＞に当たる状態が、もっとも根本的なものとされる。煩惱は、自己中心の考え、それにもとづく事物への執着から生ずる。この意味で十二因縁中の＜愛＞は、ときに煩惱のうちでも根本的なものとされる。(2)心を強くひきつける欲望、あるいは心身を悩まし苦しめ、煩わせてけがす精神的作用 [対語] 悟り、正覚

菩提：サンスクリット語 bodhi の音写。仏陀の混ざり気のない正しい悟りの智。一切の煩惱から解放された、迷いのない状態。涅槃（ねはん：すべての煩惱の火が消えてすがすがしい心身の状態になった境地）と同義。

真如：「あるがままであること」という意味があり、真理のことを指す。

仏智：仏の欠けたところのない智慧（ちえ）。

^{しゅじょう}**衆生**：心をもつすべての存在。苦のある世界である三界を輪廻(りんね)する。「人々」という意味で使われることが多い。時として、仏・菩薩をも含めることがある。

^{しょうじょう}**清浄**：(1)清らかでけがれのない・こと(さま)。せいじょう。(2)〔仏〕 煩惱(ぼんのう)や罪などがなく、清らかなこと。「六根一」

^{ねほん}**涅槃**：(1)あらゆる煩惱(ぼんのう)が消滅し、苦しみを離れた安らぎの境地。究極の理想の境地。悟りの世界。(2)死ぬこと。また、死。入寂(にゆうじやく)。

^{ぼんぷ}**凡夫**：(1)平凡な普通の人。凡人。(2)〔仏〕 仏教の真理に目ざめることなく、欲望や執着などの煩惱(ぼんのう)に支配されて生きている人間。異生(いしろう)。

^{ふじ}**不二**：(1)二つとないこと。無二。「この不同一の乾坤(けんこん)を建立し得るの点に於て/草枕(漱石)」(2)二つでなくて、同一であること。等しいこと。「塵体の一に達し、滴心の如一を覚るは/性霊集」(3)手紙の末尾に記して、十分に意を尽くさないという意を表す語。ふに。

^{そうそく}**相即**：華嚴思想で、万物が互いに他の全事物を含みこんで、一体として存在していること。